

半集



楊漢苦齋

1262

60

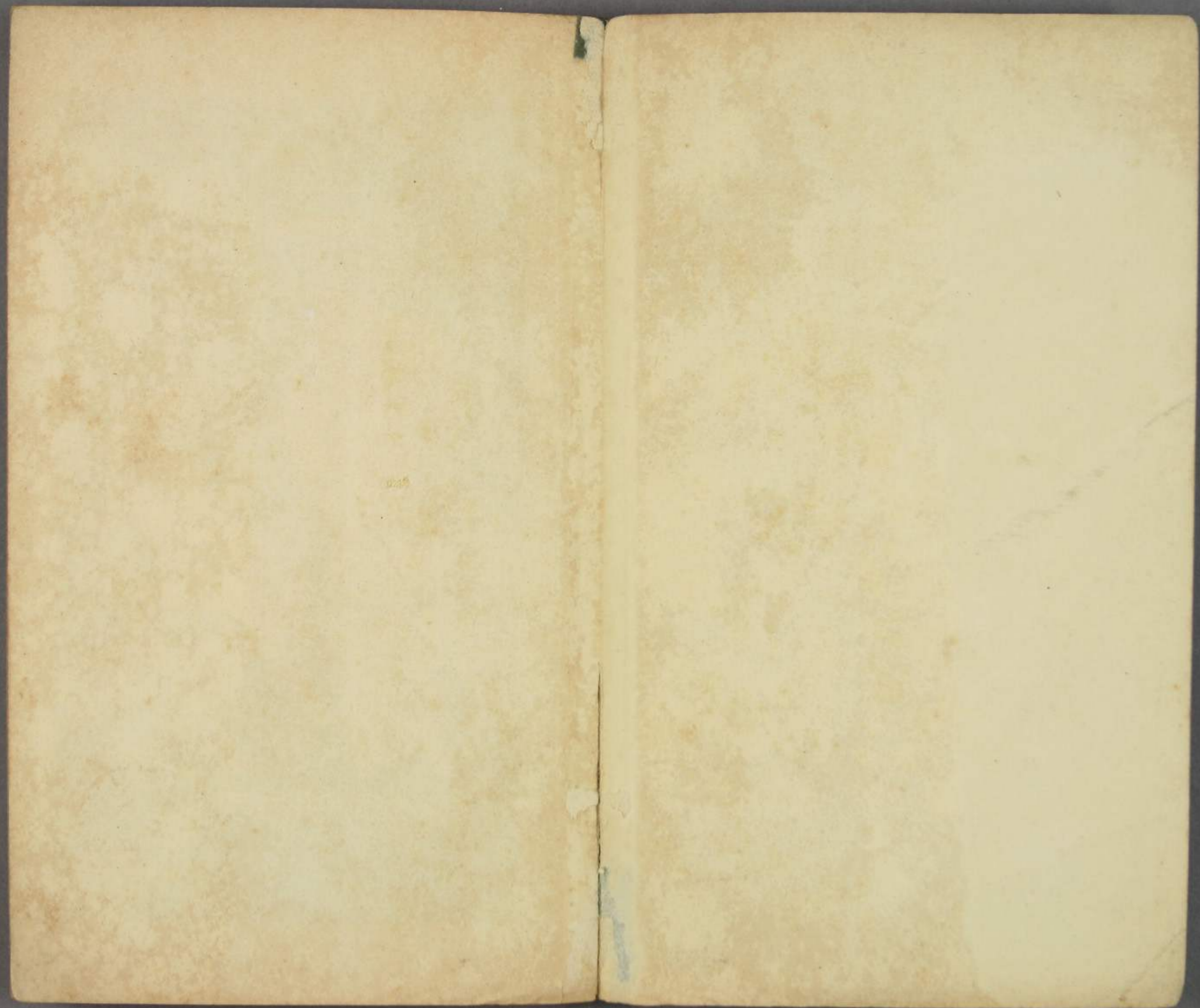
65

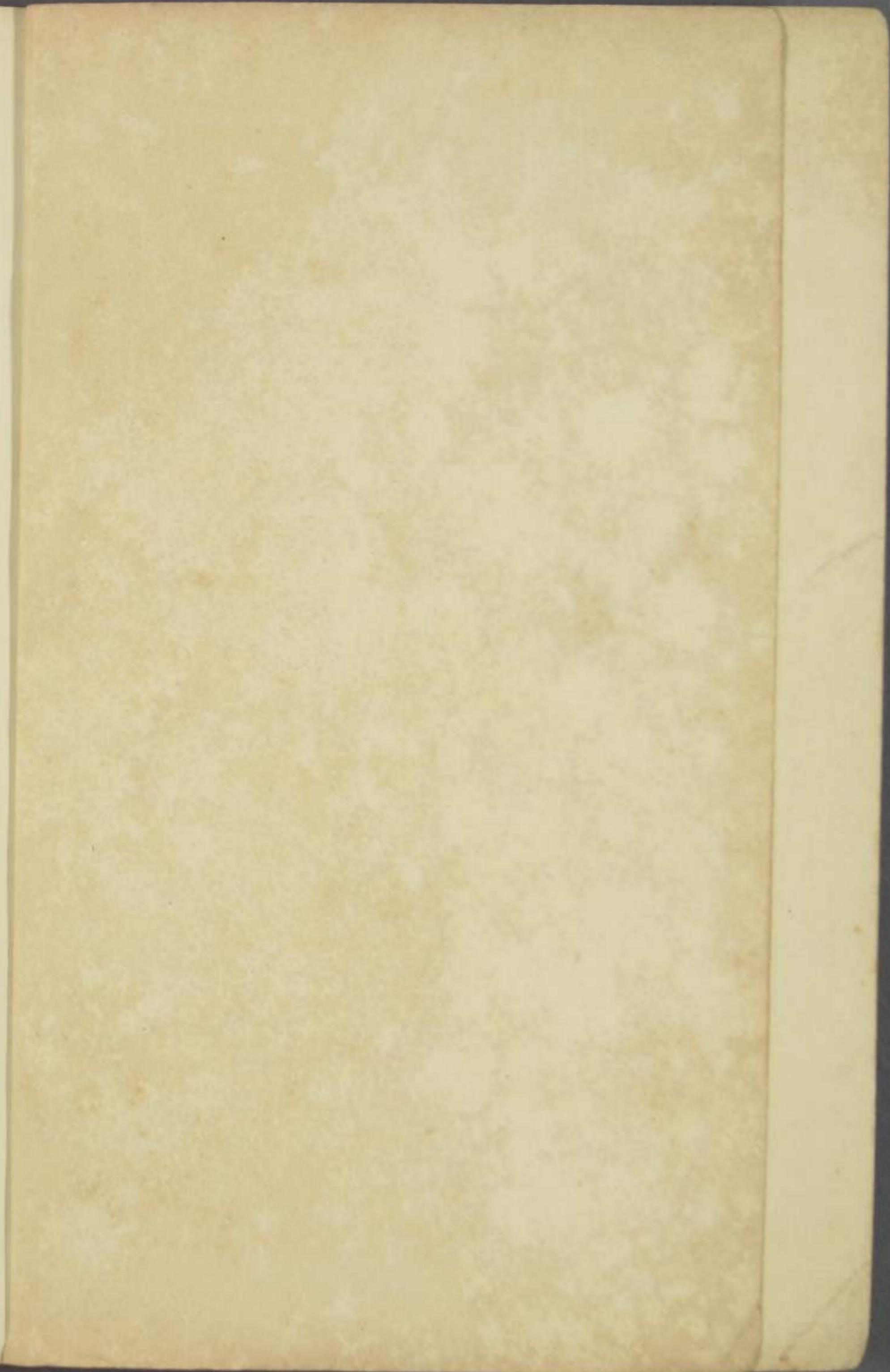
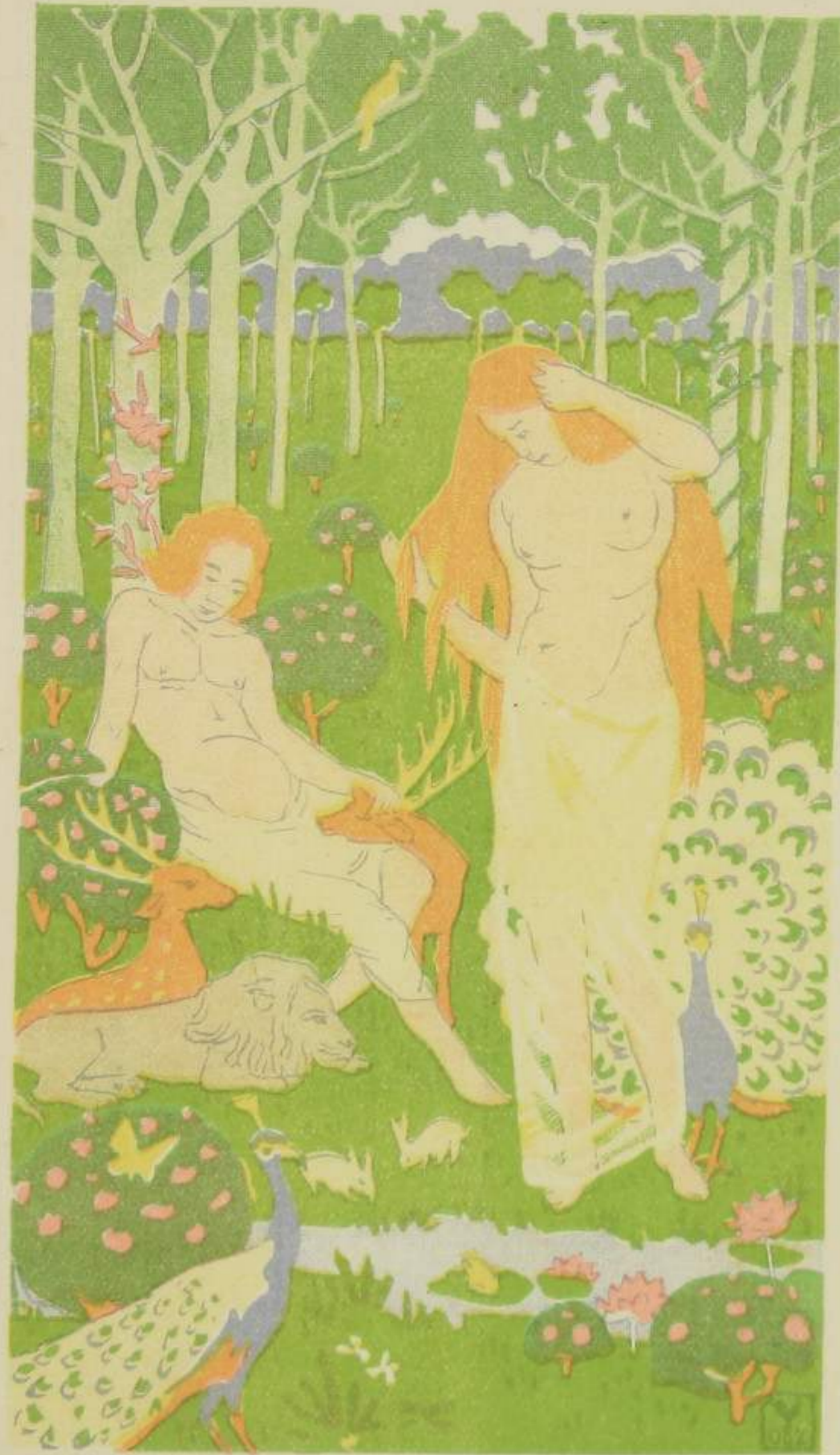
70

75









天地初發
大西祝氏
著

故文學博士大西祝氏が『天地初發』
を評して著者に寄せられたる手翰

此の書は、往つ白銀の... 光がしの... 神... 名... あり... あり... あり... あり...

故文學博士大西祝氏が『天地初發』
 を評して著者に寄せられたる手翰

目次

天地初發	一
黃泉門	一九
神子と魔王	二八
七雷	四七
大極殿	五一
百猿舞	五七
斥候兵	八七
筆力	一〇〇
君が代	一〇六
天長節	一〇九
秋田家	一一二

半月集目次終

新婚旅	二七
天然	二三
松と藤	二五
菊	二九
聖誕祭	三三
洪水	三九
戀	四四
愛犬	四七
山墓	五一
古英雄	五七

天竺初發

靜なるものにもあるかな、
 永遠の黒暗いとふかき
 水の面。

水覆ふ黒暗ふきはらふ
 靈風のうちにあやしき
 聲すなり。

「人の子」よとよばれてひとり
おどろけばかさねてよびぬ、
「人の子よ」。

よぶは誰ぞ、神の使か、
羽衣の黄金の袖の
音もせず。

よぶは誰ぞ、神の子等か、
雲鳥の紅錦の裾の
影もなし

見あぐれば黒暗ふく風に
聲ありて三たびよびけり
「人の子よ」

二

聖靈

「きよからぬ肉の眼をもて、
おろかにも聖靈をみると
思ふかや。」

日の本の歌仙もいまだ
しら雲のうへなる天の

二

神あそび。

ひかし我へブライ人に
さかせたる天地初發の
神樂歌。

汝がために天水地の
三の靈今やうたはん、
いざやさけ。

天靈

「光あれよ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
いざやみよかし元始なき
常夜の黑暗も明そめて、
暗にわかるゝ光かな。
みよや光は晝となり、
くらきは夜となりにけり。
此新らしき光をば
善とみたまふエロヒムの
大御業こそかしてけれ。
夕となり朝となりけり、

第一日の日

水靈

「荒巖岸のさかひなく、
底ひしられぬ水の中に
穹蒼あれ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
水の中なる穹蒼の上と
下とに水と水と
立分れつゝ、久方の
天つみそらとなりけり。
空の海にも風たちて、

第二日の日

地靈

「水あつまりて大地を
あらはせかし」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。

天の下なる水はみな
ひとつ處にあつまりて
大洋とこそなりにけれ。
水の面にあらはれて
乾き初めくる地はみな
高峰とこそはなりにけれ。
「いまや野山に草の種
木の實なれ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
若草もゆる池のべに
花はいろくさき出ぬ、

青葉しげれる岡のべに
木の實さまくになり初ぬ。
此新らしき海山を
善とみたまふエロヒムの
大御業こそかしてけれ。
夕となり朝となりけり、

第三日の日。

天靈
「大空たかく光明ありて
地を照せ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ

色めづらしき青空の
みゆるかぎりは雲もなく、
いまさしのぼる日は初日、
月は新月晝と夜、
光と暗をわかちつゝ、
日は日を治め、月は夜を
まもるものとぞなりにける。
見よ、暑き日も寒き日も、
播種時も、収穫時も
かぞへて知れよ天つ星。
此新らしき光明をば

善とみたまふエロヒムの
大御業こそかしてけれ。
夕となり朝となりけり、
第四日の日。

水靈
水に魚すめ穹蒼に
鳥とべかしとエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
波しづかなるわたつみの
海の深みに鯨うき、
岩きりとほし谷間ゆく

川の浅瀬に若鮎とぶ、
ひれふり遊ぶうろくづの
うかぬ淵こそなかりけれ。
たゞよふ雲に嵐ふき
高峰の岩に鷺さけび、
残る日影に小雨ふり
麓の森に鳩のなく、
はね試むる百千鳥
鳴ぬ空こそなかりけれ。
此新らしき魚鳥を
善とみたまひとく生よ、

繁息よ、充滿よ」と殊更に
祝ひ給へるエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり朝となりけり

第五日の日。

地靈

「大地の面に昆虫もすめ、
獸もすめ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
深山の小鹿、峰の猿、
幽谷の荒熊、洞の獅子、

岡^{おか}べの羊^{ひつじ}野^の邊^べの牛^{うし}、
小^せ草^{くさ}がくれにはふ虫^{むし}の
數^{かず}もしられず、誰^たが爲^{ため}に
これらを創^つ造^くりたまひけん、
此^こ美^うくしき大^{おほ}地^ちの
主^{ぬし}となるべきものやたれ。
神^{かみ}言^{こと}きかんとかしこくも
御^み前^{まへ}にちかくつどひたつ、
神^{かみ}の子^こ等^らをばみたまふて、
「いでやわれらに像^{かたど}りて、
人^{ひと}てふものを創^つ造^くらなん、

そをば男^{おとこ}と女^{をんな}とに
つくりて大^{おほ}地^ちを治^{おさ}むべき
長^{おほ}となさん」とエロヒムの
詔^{のたま}ひければ然^{しか}なりぬ。
人^{ひと}の糧^{かて}なる木^き々の實^みの
味^{あじは}ひうまし鳥^{とり}獸^{けもの}
食^{くら}ふみどりの草^{くさ}多^{おほ}し。
「人^{ひと}も獸^{けもの}も皆^{みな}生^{なま}よ、
繁^ふ息^へよ、充^み滿^てよ」とエロヒムの
祝^{しめ}したまひぬ。見^みよ、人^{ひと}は
神^{かみ}の像^{かたち}につくられて、

野山の獸、空の鳥、

海のいろくづことくく

治むる君となれるかな

此新らしき天地の

萬物をいと善しと

よるこび給ふエロヒムの

大御業こそかしこけれ。

夕となり、朝となりけり、
第六日の日。

四

天靈

エロヒムの

神榮高し、いや高し。

日も、月も、星も

創造たまひし空を見よ。

水靈

エロヒムの

神意深し、いや深し。

洲も、磯も、島も

創造たまひし海を見よ。

地靈

エロヒムの

木も、神み力ちから廣ひろし、
草も、花はなも、いや廣ひろし。
創造つくりたまひし山やまを見みよ。

五

三靈
聖きよし、聖きよし、いや聖きよし。
高たかし、深ふかし、いや廣ひろし。

天地あめつち創造つくりる御業みわざより
やすませ給たまふエロヒムの
祝いわしきよめし日ひにしあれば、
夕ゆふもなく、朝あさもなかりき、
第七なな日ひの日ひ。

黄泉門

「やよや門守かどもりこゝろせよ。
何をなに得えんとて美うらくしき
イスタル神かみや來きたらん。

もしも「かへらぬ國くにの法のり
いなまば、黄泉よみの石いしの門かど
かたく鎖くわしてこばむべし。

されどもしひて死しの法のりを

まもるといはい、巖の戸を
あけて女神をいれよかし。」

アラトが宣示おもければ、
門守いそぎいで迎ひ
「イスタル神にいひけらく。」

「いざ入たまへ姫神よ。
七重の戸びらとくいりて
深きおもひをとけたまへ。」

第一の戸をひらきつゝ、
門守しひて御髪より
花の冠をぬぎとりぬ。

女神

「など冠をばぬぎとるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第二の戸をばひらきつゝ、
かれは女神の御耳より

眞珠の耳環ぬきとりぬ。

女神

「など耳環をばぬきとるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第三の戸をひらきつゝ、

かれは女神の御頸より

瑪瑙の頸輪ぬきとりぬ。

女神

「など頸輪をばぬきとるぞ」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第四の戸をばひらきつゝ、

かれは女神の御胸より

玉の胸當ぬきとりぬ。

女神

「など胸當をぬきとるぞ」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第五の戸をばひらきつゝ、
かれは女神の御腰より
石の細帯ときさりぬ。

女神
「など細帯をときさるぞ。」

門守
「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第六の戸をひらきつゝ、
かれは女神の手足より
黄金の鍔ぬきとりぬ。

女神
「など鍔をばぬきとるぞ。」

門守
「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第七の戸をばひらきつゝ、
かれは女神の御體より

紅錦の御衣はぎとりぬ。

女神

「など衣をばはぎとるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

「かへらぬ國の風さむみ、
はだ衣もさざる姿にて
常暗ながらはづかし。」

女神

「いからばいかれアラト神、
あはれ生命の水くみて
そゝがばいきん我男神。」

アゝ我戀よ汝がために
我たづぬるは岩石もて
アラトがかくす眞清水よ。」

神子

魔王

一

ユダの荒野の夕月夜
椰子の木蔭の暗ければ、
底ひしられぬ死の海の
浪のひききぞかすかなる。

二

血汐したる草原に
山羊の片耳食殘し
巖の洞にやかへりけん、

三

野鹿の骨をくはへゆく。
怪しき鳥は通はねど、
棕櫚の葉を月に月落て、
虚空にももの響しけり。

四

變化のわざか、惡靈か、
何かたゝすむ心地して、
身の毛もよだち骨うごき、
細聲さけばものすこし。

五

「我は暗世の主宰にて、
光をきらふ毒蛇なり。
眞理をにくみ、道をすて、
生命をいとふ魔王なり。」

六

我には見ゆる象なく、
火をはく口もあらざれば、
鋭き牙も利瓜も、
角も翼もなかりけり。

七

雨よ、嵐よ、雷よ、

音をなたてぞ電よ
火焰いだしぞ雲よ汝は
いできて我をのせゆけよ。

八

ナザレの里の工匠なる
ヨセフがこゝろ惑はして、
マリヤを不義の妻とまで
おもはせしかど事成す。

九

ダビデの村の孩子を

みなころせとてヘロデ王
おくる刀をあやうくも
遁去りしぞ口惜しき。

十

十二の歳の春祭
子をばかくして兩親の
こゝろをいたくいためしが、
殿の内にて見出しぬ。

十一

王も、祭司も、學者等も、
パリサイ人も、サドカイの

徒黨も皆我命あ

そむかぬものとなりしかど。

十二

駱駝の毛衣、皮の帯、
髪かみの毛けながき豫言者よげんしやの
悔改くわいあらためよ天國てんごくは
近ちかしとさけぶ荒野原あらのの

十三

蝮まむしの裔ごといはれても
人のこゝろはヨルダニの
きよき流なみだにをりたちて、

世の罪負へる小羊を

十四

ヨハ子あが洗あふおりしもあれ、
あやしき事ことのありしをば
四十日じゅうにち経へし今日けふも猶なほ
ぬすれぬ民たみはいと多おほし。

十五

さゝやく聲こゑのやみぬれば
やがて悪魔あくまを一ひと村むらの
雲くもののせ行く空そらみれば、
夜深よふかき星ほしの影かげさむし。

十六

草木くさきもねぶるころなるに
獨ひとりねぶらず基督きりすとは
白しろき御袖みそでにおく露つゆの
ふかき思おもひに沈しづみつゝ、

十七

ながき四十しじゅう夜や野蜜のみつをも
蝗いなごも食めで過すしかば、
御顔みかほもやせて御目みめさへも
いといくばませたまひけり。

十八

三
苦むす岩に夜もすから
腰うちかけて居たまへば、
空より雲のくだり来て
試むる者いゝけらく

十九

「などかく餓て苦むぞ、
もしも爾が至高き
ものゝ子ならば、野の石を
パンとなしても食ひ得可し。」

十二

「パンのみにては活られず。」

人の生命は只神の
言によると録されし
聖誠あるをしらざるや。」

二十一

主の御こたへにおどろきし
悪魔やいづこしら雲の
猶たゞよへる空ならむ、
獨りさゞやく聲すなり。

二十二

「ア、あやまてり、あやまてり、
エデンの園の花の蔭、

小草が中に美しき
蛇となりてもありしとき、

二十三

色はうるはし、味はよし、
知慧の樹の葉に迷ひたる
婦の裔としらずして、
こゝろみしこそうたてけれ。

二十四

むかしモウセの屍を
我とはげしくあらそひし
ミカエルよりも猶まさる

今宵の敵をいかにせん。

二十五

我いふまゝにイスラエル
民をかぞへし王の子の
礎おきし殿なれば、
彼つれ行きて試みん。

二十六

聖き都の神殿みれば、
屋の棟高く一むらの
雲もかゝりて基督は
はやくもそこに立たまふ

「彼の子ならば已が身を
こゝより投よ、敷石に
ふれざるうちに使等の
来て支へんと録されぬ。」

「神を試む可からずと
録されたるをしらざるや。」
荒野にかへる基督の
うしる姿をみをくりて、

雲にのる者いゝけらく
「彼が聖律をひきしかば、
我も詩篇の句もて
こゝろみたれどしたがはず。」

おもひぞいづるウツの邑、
家畜うばゝれ、家やかれ、
子等も僕もころされて、
身さへ病になやみしが、

妻の嘲、その友の

議論にもうちかちて、
我誘惑をのがれしは
一人なりしを思ひきや

三十二

ヨブより強き我敵の
此世の中にあらむとは。
いざレバノンの頂上に
彼つれゆきて試みん。

三十三

熊もかよはぬ香柏の
林がくれをいかにして

のぼりましけん、基督の
たてる高峰に雲もみゆ。

三十四

東の野原みわたせば、
ニ子べ、バビロン、ダマスコス、
西の海山みおろせば、
ロウマ、アデンス、ツロ、シドン、

三十五

近きサマリヤ、エルサレム、
猶エチプトにあれのこる
都もみえて足下に

みねぬ國こそなかりけれ。

三十六

我を拜さば國といふ

國みな汝にあたへん」と

いゝし悪魔をかへりみて、

主は聲あらくのたまへり。

三十七

「サタン退け、唯主なる

神をば拜し、之にのみ

したがふべしと録されし

聖訓あるをしらざるや。」

三十八

さらばこれよりゲツセマ子

髑髏が岡の十字架の

上にてまたんとく來よ」と

いふかと思へば雲消ぬて、

三十九

夜もあけたれば、今はとて、

山路をくだる基督の

前に後にあらはれて、

天つ使はうたひけり。

四十

「救世の主よ萬歳よ、
ダビデの裔よ萬歳よ、
平和の君よ萬歳よ、
勝利の王よ萬歳よ。」

七 雷

獻げまつれよ神の前、
雲の宮の神の子等。
神の御前にたてまつれ
猛き能力も尊榮も。
神の御前にたてまつれ
名にふさはしき榮光を。
拜みまつれよ神の前、
聖き祭服をとくつけて。

二
神の御聲は鳴そめて、
雲の波たつ空の海、
夕だつ雨ともるともに
天降ります神をみよ。
神の御聲は天の原
ふみとゝるかす武力あり。
神の御聲は雲の峰
ふみぐづすべき稜威あり。
あなかしこしや雷も
エロヒム神の力かな。

三
神の御聲の鳴ごとくに、
峰の香柏をりくだく、
レバノン山の香柏を
をりさきたまふ神をみよ。
雲にかくるゝ峰をさへ
小牛のどとくおどらせぬ、
シリオン山も年少き
野牛のどとくおどらせぬ。
あなかしこしや電も
神の御聲の光かな

神の御聲は猶鳴て
 雲風ある、荒野原、
 カデシの野をばあらしつゝ、
 天翔ります神をみよ。
 神の御聲におどろきて
 はらめる鹿も子を落す。
 雨にうたれて青葉さへ
 枝よりきれて散にけり。
 天つ宮居の神樂歌
 うたふもたかき榮かな

四

吾

神の御座は夕立の
 名残の雲のいづこぞや。
 神はかへりて永遠の
 王の寶座につきたまふ、
 神は能力をその民に
 今こそくだしたまふなれ。
 神は平安をその民に
 今こそくだしたまふなれ。

五

大極殿

五

冷泉橋をたひひとり

わたる疏水の風さむみ。

應天門を過行けば

石の御階におき初し

霜うつくしき碧瓦、

大極殿の右左、

蒼龍白虎も高樓の

丹ぬりの軒に朝日さし、

黄金の鷄尾はまばゆくも

晴たる空にかがやきぬ。

玉垣つくる神杉の

木の間にちらと村紅葉

なびくとみしは雲鳥の

綾の御衣のうごくなり。

松にかけたる羽衣の

袖こそみね紅の

御袴ながし御姿は

天つ處女にことならず、

かほるもあやし白菊の

花の御顔は立田姫、

まことに秋の女神なり。

女神は我にいひけらく

「いざやきけかし我友よ、

櫻は一夜蓮は朝、

さかりみちかき世ならずや。

柳に野分竹に雪、

折られがちなる世ならずや。

野山に木くは多けれど、

楓にまざるものやある。

もし樹を植ば汝が庭に

かならず植よ若楓。

春の若葉もめづらしく、

夏は青葉の陰すいし、

秋の紅葉の色深く、

冬は「といふて口ごもる。

「冬は」としひて問ひければ、

うちゑみながら「冬はまた

落葉かきよせたき火して、

木がらし寒さ冬の夜を

わすれよかし」とよりそひて、

御口をおはれ我頬に

つけなんとするをりしもあれ

平安宮の殿司
八ひら手たかくうつ音に
さめておもへば夢なりき。

百猿舞

お猿は目出たや目出たやな。
コレく見ざるや猿のすむ
峯の松原雲はれて、
初日の影は句へども
また雪深し谷蔭の
ねぐらの竹もをれふして、
片山里の梅の花
咲しいでねば春來ぬと、
そらねもなけぬ鶯を

古巢ながらに残しおきて、
子猿はいだき親猿は
肩に背負ひし、風呂敷の
上にのせつゝ深山より
都に來るや猿舞、
申の歳とて常よりも
今年にはやく來りけり。

都は人の海なれば、
こゆる年波面白く
くるりとかへつて、たつたりな、

たつたら、ついでにひとつ舞へ。
お猿は目出たや、目出たやと
ひきつゆるべつ麻手綱、
ひくやあみ笠猿引の
腰の餌ふををつるし柿、
かち栗、蜜柑いろく
年の祝の木の実をば、
もらひためては又猿に
わけてやるこそあはれなれ。

ヤコレ、コレ
三
猿舞の

歌のかけ聲にぎやかに、
花の袖なしよそほひて、
かく百猿のむかしより
舞ひしためしのあるかひな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ、
さりとはく、ノウあるかいな、
さんなまたあるかいな。

花の都の猿舞

ちまためぐりて、商人の
家ものこらす舞ひつくし、

市の外まで舞ひいでぬ。

神社、佛閣、教會堂、

こゝも浮世かさまぐに

年の始をいはひ杉、

青葉かざれる禮拜堂、

松竹たてし法の門、

神代おぼゆる玉垣の

神にかけしみしめ繩

ゆひあらためて世をきよめ

けがれを申の年はきぬ。

ヤコレ、コレく今年より

目出たき年のあるかいな
さんなまたあるかいな。

庚申塚の跡みれば、
見ざる聞ざる言はざるの
石も野川のかり橋と
いつかなされて、山賤が
草かりざるのをせてゆく
馬にふまるゝ世なりとは
しるやしらすや、玉銚の
路をまもりの猿田彦、

道祖神社の祭とて、
猿女の舞か、猿舞か、
黄なる扇を腰にさし、
鈴ふりならす袖青し。
沐猴にして冠すと
みざるものなき黒烏帽子、
白ゆふかけし榊葉の
色もかはらぬ神やしる、
御前にしける菅薦に
かしてみふして八ひら手の
ひいきも高く大幣を

手向まつれるうしろより、
 鏡にうつる影みれば、
 里の氏子が供へたる
 神の大御酒をなへざる、
 ささに毒味やなしつらむ、
 髭いかめしき宮司
 くばめる眼いろ赤し。
 六
 秋の芭蕉のやぶれ笠、
 それさへ欲しき初時雨、
 音にきこゆし猿蓑集、

風に散りくる奥山の
 紅葉かきわけ栗ひろふ
 猿丸太夫、小男鹿に
 けられてキヤツト鳴く聲を
 きくぞかなしきやまとうた、
 よまぬものなし百人首、
 豊太閤記、清正傳
 猿蟹軍記、猿小説、
 狙仙が筆のいのち毛の
 さし畫は殊に面白き。
 猿文學を見ても猶

すめら御國を言靈の
幸はふ國といはざるや。

神の古事記なるに

そのふみをさへまなばざる、
べからざるともおもはざる、
宮主は猿にまさるかや、
ヤコレ、コレ、猿にさへ
しかざる人の國の道
説きしためしのあるかいな
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ、

さりとはく、ノウあるかいな、
さんなまたあるかいな。

八

幾春秋をふる寺の
苔むす軒の破瓦、
かくすもあはれ夏木立、
猿も涼しく午眠する
青葉がくれに花咲きて
さかりひさしき百日紅、
冬枯そめし梢より
すべり落來る木の葉かな。

御堂ごどうに安置あんちす弘法こうぼうの
筆ふでの誤あやまり、樹きから猿さる
落葉らくえつみだるゝ木こがらしに、
音ねさへわたる入相いりあひの
かねはあだなる世よをすてゝ、
山やまに入いりにし法の師しの
植うゑし蜜柑みつかんのいかなれば、
こがねいろにやいでぬらむ、
壁かべに向むかはぬ禪僧ぜんそうも
まだ色青いろあおき九年くねん母ぼ

食くひつゝ猿さるのこしかけて、
日向ひなたにむきて墨染すみぞめの
袖そでの縫目ぬいめをかきわけて、
虱しらのみとる世よとなりけり。

十

時雨しぐれをよきて木の葉は猿さる
かけにかくれし山寺やまでらの
石いしの佛ほとけの御袖ごそでにも、
霜しものむすびて寒さむければ、
くみて手た向むかる人ひともなき
あか井あかゐの水みづやこほるらむ。

氷くたきて世の垢を
洗ぬ岩の苔も、
頭巾、猿股、乳のみ子の
外には着ざる猿でんち、
棹にかけつゝはすやたれ。
日影戀しき冬ながら
障子とぎして、方丈の
椽にもださず三猿の
法の綱にて括り猿、
いかにくゝるや猿轡、
あはれ和尚がかくし妻、

見ざるものには言はざるも、
副寝する子の泣聲を
聞かざる人やなかるらむ。

十一

寶物展覽、大法會、
黄金佛の再建立、
またもちまはる奉加帳、
檀家めぐりて布施ばかり
鳥の骨焼、牛の肉、
魚のはらわた食ふみれば、
口を耳まであき皿に

生血ばかりぞのこりける。
意馬心猿の狂ひ酒
何か肴をほし月夜、
水鳥ねらふ猿澤の
池の舟底朽にけり。
法の舟人かの岸に
到らぬさきにしづむらむ。
水にうかべる月影の
月ならざるをしらざるや。

十二

西の空のみとぶ鷺の

高根の雪をふみわけて、
世のうき雲のかゝらざる
真如の月をながめざる
べからざるともおもはざる、
僧侶は猿にまさるかや
ヤコレコレく猿にさへ
しかざる人の法の道
説きしためしのあるかいな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ
さりとはく、ノウあるかいな、
さんなまたあるかいな。

松にかゝれる藤蔓

紅だよりつるにとびうつり、

手に手をつなぐ手長猿、

さがる谷間の水のおも、

つるより紅だにとびかへり、

手に手をととりて友猿の

のぼる高峯の雲のおく。

いづこも神の家なるに、

たい教會の内のみ、

神はいますと思ひけり。

この世彼世のつだてさへ、

あらざる神の國なるに

その會堂も来てみれば

世を白壁のよそにして、

ひとりたかくぞたちける。

禮拜堂の花かざり

うばらも百合も一束に、

たばねてさすや束髪

少女がひける風琴の

いつもかはらぬしらべかな。

いつものかはらぬ讚美歌を
 きけばねふりて、此世より
 いよ／＼遠く鳴銅や、
 響く鉦音たかく
 机たゞきて聴く人の
 夢おどろかす説教者、
 名のみきゝたる外國の
 大説教者の口まねに
 手まねをそへてキヤツ／＼と
 何をいふらむ、山猿に
 あらざる人のなか／＼に

さかせられてもわからねば、
 天つ使の御言かと
 思はぬものやなかるらむ。

十五

遠きむかしの豫言者も、
 使徒も知らざるいまの世の
 社會問題、禁酒論、
 比較宗敎、進化論、
 まさるはまさる、おとれるは
 おとれるなりといひながら、
 まさるものにしたがはず、

猶おとれるを嘲りて、
しるき齒をさへ剝出し、
わらふも猿の尻笑ひ、
朝三暮四の新神學、
高等批評も其種は
古き書より鳥の跡、
蟹のあとなる異國の
文の中よりぬすみ來し、
柿の蒂なる長談義、
きけばはてなし尾長猿、
をはりまできく人ぞなき。

十六

夜の祈禱の集會より、
かへればやがて高帽子、
古洋服をぬぎすて、
ころりと閨の小夜衣、
うちかつげどもねふられず。
むかふともしびかゝげつゝ、
針もつ妻に言ひけらく、
知るや吾妹子、人よりも
三筋たらざる猿の毛の
筆とるわざのはかなさを。

硯の海の藻しほぐさ
かきちらしたるかひもなく、
たまもあらざる説教の
草稿なりし鶴文章、
あはれ都の新聞の
紙折舟にのせられて、
文學海にうかべども、
こぎゆく掉の露ぼども
報酬を得たることはなし。
机の島による浪の
音になたてぞ人しれず

實業海に入江舟、
底ふかゝらぬ猿智慧の
はたらき多き世ならずや。
あし分小舟さはりあらば
海月だましてのり行かん。

十七

都にゆかば駒の引く
車もあれど猿引の
背にうちのりて猿芝居、
まづみにゆかん白猿の
むかしゆかしき堀川の

名も與二郎が一段、
夢幻か、現實か、靴猿
能狂言もまたおかし。
春は花見て日にくらし、
秋は月見て夜をあかし、
夏は海邊に汐あみし、
冬は温泉にいでゆかん
庭のすぎ垣すき通る
猿頬の天井、杉の窓、
猿戸かゝやく家たてよ、
都のうちにすむもよし。

またせ吾妹子、そのときは
蟹のむすびとりかへし
種も大木となる柿の
思ふがまゝになりぬべし。

夢物語きかせられ、
よろこぶ妻がおきてたく、
朝食の箸をひるとりて、
くらふ栗飯その嚙に
何の貯あらずとも、
かわける人に水一杯

あたふることのならざるや。
幹より枝をささてとる
葡萄の汁と思ひしに、
何をのめばか顔の色
あかくなるまで酔ぬらむ。
机のもとにねふりつゝ、
聖書まくらに高野、
主の誠命をまもらざる
べからざるともおもはざる、
牧師は猿にまざるかや。
ヤコレ、コレ、猿にさへ

しかざる人の神の道
説きしためしのあるかいな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ、
さりとはく、ノウあるかいな、
さんなまたあるかいな。

十九

お猿は目出たや、目出たやな、
たつ年浪ともろともに
くるりとかへつてたつたりな、
たつたらついでに目出たくも、
舞をさめずや百猿よ。

ヤコレ、コレ、人はもと
猿ならざるや、いかにして
猿と人をつくりけん、
神のみわざはしらねども、
今の世の中よくみれば
猿とも人ともわからざる、
ものゝみ住みぬ、むかしより
かゝるためしのあるかいな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ、
さりとはく、ノウあるかいな、
さんなまたあるかいな。

斥候兵

いなく聲やいとひけん、
一 駒にもならず終夜、
深雪のうちにたち剣、
みもさねわたる斥候兵。
二 敵のねふるを松陰に、
月をばよきて谷をしに
峰の陣營をみわたせば、
旗吹く風の音さむし。

三
杉の枯枝かきあつめ、
檜のふし柴ふしなから、
たくやたき火の影白く、
降来る雪もみゆるかな。

四
ふりさけみれば大空の
月は雲間に照ながら、
谷にしら雪つもる夜は
木の下陰も暗からず。

五
山はさながら真晝にて、
峰路さやかにみわければ、
夜明もまたす松の火も
ともさで敵やたちけん。

六
みよや陣營のかゝり火も
いつしか消て山風に
なびさし旗の影もなく、
雪さへしばし降やみぬ。

七
血しほのながれ骨の山、

いくさの後の野にいで、
屍たづぬる狼の
通ひし外に路もなし。

夜深き雪に荒岩の
うづばにこもる熊笹も、
木の根も草も埋れて
とりすがるべきものもなし。

九
からくもくだる岩岸の
雪折竹の末ふして、

さやかにみゆる谷川に
水のみ虎の聲すなり。

十
雪にのこれる草鞋の
あとなさきみつゝ斥候兵、
劍を杖に山川の
氷の上をわたりゆく。

十一
夜や明ぬらん屍に
さわぐ鴉の聲さむし。
敵はいづこに雪の路、

大筒ひきし車の輪、

十二

駒のあしがき、靴の跡、

のこるもあやしあや杉の

あやしと思へば筒の音

耳もとちかくひいさけり。

十三

旗、馬印、鐘、太鼓、

うちたゞきつゝ足引の

山もさくべき音ながら、

敵はわすかに五十の浪。

十四

「騒がば騒げ、さわぐとも、

やがてくだきて歸らなん。

先にかへりて此よしを

我中將につげよかし。

十五

歸れといへど斥候兵、

敵みていさむ武士の

こゝろの駒をとめかねて、

すゝまゝはしくみおにけり。

十六

猶たつ兵をかへりみて、
「死ぬることのみ勇士の
名譽ならんやなか／＼に
敵にうしるはみするとも、

十七

自己にかちて歸るこそ、
斥候する身の義務なれ
歸れ」といへば今はとて
三人の兵ぞかへりゆく。

十八

のこる一兵はあだ浪の

よると間もなくながれ弾丸
うけてあなとも岩岸の
たちまちそこにたをれけり

十九

太刀風あらくた一人
さかまくなかにきり入りて、
五十のあだ浪追かへし、
かしこにくだき、こゝにきる。

二十

ちかよ리카ねて木の間より、
岩の陰よりうちかくる

彈丸をば三たび身にうけて、
氷の刃くだけゝん。

二十一

たをれてやみし勇士の
屍を敵にみせじとや、
降かくすらん白雪の
いさぎよき名を残しけり。

二十二

「いきて再び還らト」と
いひしは日本武士の
つねの言葉の花とのみ

思ひしものをみよやみよ。

二十三

屍の上うへにふる雪の
うづみのこしゝ軍服、
黄金こがねの鈕ぼたん卸しり、白銀しろがねの
帯おびもかゝやく玉劍たまづるさ、

二十四

さすや朝日あさひの影かげあかく
血ちしほながれて軍靴いくさつ、
ふみちらしたる白雪しろゆきも
花はなのいるにぞいでにける。

二十五

あはれ人皆五十歳の
ながき命のたゝかひに
ありとしらすや、花に風、
月に村雲、雪に泥、

二十六

ふみつふまれつ鳥獸、
鷲のあら爪、獅子の牙、
たけり合つゝ仇し世に
敵なきものやなかるらん。

二十七

されば國家の敵をうち、
君にさゝげて、いさぎよく
身を散らすこそ敷島の
大和心の花ならめ。

六

九

筆力

一

みがけや劍、とれや筆、
武勇は太刀にこそれども、
智徳は筆にぞあらはるゝ。
海陸軍の武將も
筆とりふるふ世なりけり。
敵の彈丸より劍より
つよきは筆の力なり。

二

號外、號外、また號外、

「我軍勝てり」と門ごとに
さけぶや新聞配達夫、
旅順口の大激戦、
「我軍勝ちぬ」と家ごとに
大本營の公報を
つたふも筆の力なり。

三

大元帥の聖勅
さよていさまぬ兵はなし。
大御心も廣島の
海より深き水ぐぎの

さやうちはらひ生命毛を
血しほにそむる將校
たけきは筆の力なり。

四

こゝろつくしの沖みれば、
運送船は港より、
港につづく兵站部、
たゞかひはてし野邊みれば、
かしこの林、こゝの森、
天幕張れる衛生隊
おくるは筆の力なり。

我艦隊の大砲の
時限弾に雲叫び、
着發弾に浪跳る、
砲烟は掩ふ大海の
潮蹴立て、清艦を
微塵にくたく水雷艇
あらしは筆の力なり。

六

我陸兵の野戰砲
たえず火を吹き雲を吐き

天地もくらく鳴神の
とゞろきわたる弾丸の雨、
空より落つる黄龍旗
清兵斬つて騎兵隊
うばふは筆の力なり。

七

渤海いまだ氷らねど、
清艦うごかすなりにけり、
天津橋の霜ふみて、
日軍やがてわたりゆく
北京城も遠からぬ

旅順口の勝軍

うたふは筆の力なり。

八

旅順半島いつまでも
我政廳をかく露の
仁恵ふかき君が代の
ラツパの聲におどろきて、
ねふりさめにし民草を
てらす朝日の旗風に
なびくは筆の力なり。

君が代

上

君が代の

ながきをいはんや、

ふかきをいはんや。

大海よ、大海原よ、

磯みれば松ふりにけり。

岩みれば苔むしにけり。

大君は

松にしませば、民は苔。

ともに千歳のふか緑、
巖もいまださゝれ石の
神代はるくみ渡せば、
海より深し君がめぐみは。

君が代の

下

とほきをいはんや、

ひろきをいはんや。

大海よ、大海原よ、

浪みれば雲にかゝりぬ。

水みれば空につゞきぬ。

大君は

雲にしませば、民は浪。

ともへだてぬ空と水、

さいれ石より巖まで

萬世かけてながむれば、

海より廣し君がめぐみは。

天長節

一

國の爲とて賤の男が

鍛とる腕のいそがしき

世の生業をつとめつゝ、

猶そのひまに植置し

庭の白菊けふみれば、

千代の花こそさかりなれ。

二

人の爲とて賤の女が

糸いとひく袖そでのいとまなき
世よの手て仕事しごともおこたらず、
猶なほそのひまに織おひ果はし
新にい桑くわ絹ぎよは紅葉もみぢの
錦にしきとこそはみむにけれ。

三

男おとこは菊きくの花はな折りて、
女をんなの髪かみにかざしつゝ、
女をんなは秋あきのから錦にしき
男おとこにさせてもろともに、
天長節てんぢやうせつの祝いひひ歌うた

うたふけさこそうれしけれ。

秋田家

あかねさす
夕日の影の残りなく、
野田も山田も刈あけて、
歸るをみれば烟管より
烟管にうつす烟草の火、
あかき心の友なれや、
二人かたらふ家路かな。
我山里の秋祭
朝日影さす庭みれば

菊にも紅き花さきて、
紅葉も今どさかりなる。
赤みの杉の板の間に
あかき花薙赤ゲツト
しきてならぶる朱塗膳。
椀にもりたるあかの飯、
赤味噌汁に芋いれて、
鮭の塩引味もよし、
初穂の小酒くみそめん、
下戸にはあはれ山柿や
栗をばやらん妹も

「あすの祭につれて来よ。」
 携て行かなん妹も、
 いまや新わたつみはてよ
 なすこともなし明日はまた、
 今年の蕎麥粉、眞白なる
 大根や葱の白根まで
 もたせてやらんいざやさけ、
 やらんといへば妹を
 誰にかやらん妹の
 こゝろは雪のやうなれど
 顔はもとより白からず、

手足もあかしされば今
 赤顔好の汝ならで
 誰にかやらん妹の
 否といふとも少女らが
 否は然ぞ妹の
 こゝろの底は我ぞしる。
 やがてやるべし白梅の
 花さき匂ふ春をまてし。
 「やよその事はかそくとも、
 明日は我家にとく来れ。」

「我われとくゆかん山里やまざきの
秋あきの祭まつりぞおもしろき」

しら雲くもの
夕ゆふゐる山やまの松まつの上うへに
いでにし月つきの影かげふめば、
河かぞひ小田おだに初霜はつしもの
おくかともみわた風寒かぜさむし。
鋤すき鍬くわ荷にふ賤しんの男おとこが
二人ふたりたどれる家路いぢかな。

新 誓 旅

山やまか、川かわか、
新 郎しんらう

いづこへゆかん我妹わが妹よ、
今日けふはいもせの旅たびなれば」。

山やまもよし、
新 婦しんぷ

川かわもまたよし、ア、我脊わがせ、
いかに行ゆへはさだむべし」。

「我が妹よ、

新 郎

山やよからん花野ゆく
二人が裾に朝露の
かゝるうれしさ旅やある。
いもせの山のすその原
草の枕のしばらくは
天つ國なり世の中も。

「否我存、

新 婦

川こそ山にまざるらめ。
棹さす袖に夕月の
かゝるうれしき旅やある。
いもせの川の小柴舟
波のまくらのしばらくは
神の國なり人の世も。

「行けとなら

新 郎

行もすべきが、いもせ川
秋霧ふかし水さむし。

新婦

「行けとなら

行もすべきが、いもせ山
秋風あらし、路けはし、

やよやきけ、

山としいへば川といひ、
川としいへば山といふ、
往方さだむる妹脊の
初あらしひぞおもしろき。
二人が袖も一方に

いつかなびきて花薄

むすぶとすれどたちまちに、
あらしひとけてもろとも、
山にも川にもいでゆきぬ

天 燐

一 花の梢こぎにふく風かぜの

ひとりふくとはみゆれども、

みじざる御手みでによらずして、

ふく嵐あらしこそなかりけれ。

二

青葉あおばの陰かげにわく水みづの

ひとりわくとはみゆれども、

みじざる御手みでによらずして、

わく清水しみづこそなかりけれ。

三

紅葉あきばの上うへにふる雨あめの

ひとりふるとはみゆれども、

みじざる御手みでによらずして、

ふる時雨しぐれこそなかりけれ。

四

枯木かれきの枝えだにつむ雪ゆきの

ひとりつむとはみゆれども、
みじざる御手によらずして、
つむ深雪こそなかりけれ。

松と藤

「新茶一杯まゐらせん、

草餅一つめせ」といふ

老婆が軒端もなつかしき

若葉の陰となりにけり。

三保の浦邊にあらねども、

松にかゝれる藤浪は、

天津乙女の羽衣の

かゝるが如くかゝりけり。

春日の宮にあらねども、

杉の森陰焔みえて、

茶摘む少女は神樂歌

うたふが如くうたひけり。

我は松なり、汝は何ぞ。

春の花ともまた夏の

花ともさらにはたまらず、

二心なる花なるか、

五

松にいひけり藤波は

「あはれうたがふ心より

鬼もいできて薪たく

竈ぞやがて地獄なる

六

烟とならばもろともに

千歳契りしかひもなし、

なびけど散らぬ我こゝろ

しらでいかるや松の風」。

七

猶吹風のあられれば、
散らトと藤はからみつき、
梢はなれぬあはれさに
松も音せずなりにけり。

新茶一杯餅一つ、
おもへばこれも戀の歌、
こゝもうき世か藤の店
うき世の外うき世かな。

菊

古き儒佛の經典も
しぐれの雨のさだめなく、
今の博士が倫理書も
たゞ木枯の音ばかり。

何をか友にかくるべき、
聖書の外に書はなし。
春の二葉の根分より
人手たのまぬ菊の鉢。

三 夏の虫さへ我とりて、
朝夕水をそよぎつゝ、
秋のさかりを待わびて
蓄つほみいくたびかぞへけん。

四

冬までのこる花なれば、
霜よけをさへつくりしが、
贈おくりる聖書みかみに何添たへん
五 菊きくより外ほかに花はなもなし。

手づからつくる葉の花、
いまさら手折たをりがたければ、
鉢はちもろともにおくらなん、
ア、鉢はちながらおくらなん。

聖誕祭

一

たましくればベツレヘム
故里なれどやどるべき
家だにあらずマリヤをば
のせきし驢馬の鞍ときて
ヨセフが旅の宿とせし
賤が廐のわびしさは
いかにありけん白雲の
夕ぬる峰はかはらねど
入相つけし山寺の

つり鐘堂は跡もなく
産土神の宮あれて
時の鼓の音もせず
小山田かへす牛馬も
小屋にかへりて休みけり
日もくれ竹にねぐらとる
鳥もさわがすなりにけり
天つみそらに星ひとつ
きらめき初てひんがしの
國よりきつる博士らの
むかしをしのお夕かな

野川のがはに二おりて米こめかしぎ
大根おほねをおらふ賤しんの女めも、
山林はやしにいりて落葉おちばかき
枯枝かろえひるふ賤しんの男おとこも、
同おなト道みちふむ友ともなれば
互たがひにいさそひさそはれて、
聖誕せいだん祝いはふ教會きやうかいの
夜よるの集つどひにいでゆきぬ。

寒菊かんきく早梅そうばい折をりませて

會堂くわいどうかざる山松やままつの
枝えだよりさげし蠟燭ろうそくの
光ひかりまばゆくみ江えにけり。
安息日あんそくじちの聖せい學校がくこう、
通かよひつゞけし男兒おとこには
喇叭らっぱ、軍刀きんとう、少女せうにょには
花はなの簪かんざし、草くさ、双紙そうし、
老人らうじんも青年せうねんもおしなべて
あたふることのうくるより
よしや冬ふゆの夜よながくとも
うたひあかさん神かみの歌うた。

やがてこゆとて都人
さわぐや今宵年波の
よるをわすれて兄弟の
笑ふも神のめぐみかな。

聖誕祭に我ひとり

おくれて行くはをしけれど、
今年早くも我宿の
庭にいろづく初蜜柑、
わかちやらんと半なる
月もさし入る柴の戸を

しづかにあけて立聞けば、
あなあはれにも盲なる
友たゝひとり琵琶とつて
かたりぬにけり、さる程に、
ユダの荒野の小夜中に
天の使等あらはれて、
羊牧者にぞいひにける
やよやおそれぞ福の
音信つげん昔時より
人みなまちし基督は
うまれたまひぬ此夕、

ダビデの邑にとくゆきて
槽にすむ嬰兒をみよ。
その後天軍あらはれて
天には榮光神にあれ、
地には恩澤人にあれ。
霜夜にさゆる四の緒の
古き調に新しき
歌を合せてひくさけば
あはれ今さら教會に
ゆくもゆかぬもかはりなく、
世はみな神の世なるかな。

洪水

水よくと叫ぶ間に
渦まくそこにひきこまれ、
たすけをよびし人々の
聲猶耳にのこりけり。
子はその親のなきがらを
になひゆけども家はなく、
夫は妻のしかばねを
そのまゝおきぬ草の上。

三
なかば落たる橋材に
かゝりし馬のはらわたを
くはへてゆくか枯枝に
烏とまじりけり秋の暮。

四
雨降夜半の野分風
寢耳に水の音たかし、
はねおさみれば床の板
はやふはつさて流れけり。

五

屋根にのぼれば屋根にまで
浪うちあぐる泥の海、
次の間にねし妹を
救ふひまさへあらざりき。

六

我手に花の袖ばかり
のこして散りし水底の
屍たづねてわが宿を
めぐりてみけり秋の暮。

七

根ながらぬけてみだれふす

井戸の柳の髪みても、
芥にくもる水鏡
うつれる月の櫛みても、

八

思ひぞいづる妹の
住にし閨のきりくす
なく赤壁に洪水の
あと猶高くのこりけり。

九

親なき後はこの兄を
親とたのみし人にさへ

死にかくれたる「秋の暮
男はなかぬものなればこそ」。

戀

前

實みとなるよりも山櫻やまざくら
花はなにてちるぞあはれなる。

花はなの梢こずえに繩なはかけて
首くびくよりしをさめやすき
色いろに狂くるひし男おとこよと
人ひとはいへども生命いのちにも
思おもふこゝろのかへがたき
戀こひやまことの戀こひならん。

さそふ嵐あらしのふかなくも
花はなおのづから散ちりにけり

後

かくるゝよりも有明あきの
月つきのしらむぞあはれなる

月つきもしづめる青淵あおぶちに
身みをばなげしを水底みずそこの
影かげに迷まよひし少女おとめよと
人ひとはいへどもつれなくも
思おもはぬ人ひとを思おもふなる

戀やまことの戀ならん。

かゝれる雲もみえなくに
月おのづからしらみけり。

愛犬

我犬の

たるゝ耳にも、まゝ尾にも、

櫻ちらして梢ふく

風のこゝろもしら雪の

ふりしく庭とよるこびて

あはれケレブがあそびしも、

昔となりぬ花の門。

ケレブよ、ケレブよ、

散る花は

また咲く春もあるものを
汝はかへらず成にけるかな、

我犬の

たる、耳にも、まゝ尾にも
露おく夜半に獨立つ
われを主人としら菊の
咲ける垣外の野邊をみて
あはれケレブがとがめしも、
昔となりぬ月の門。

ケレブよ、ケレブよ、
入る月は

また見ん秋もあるものを
汝はかへらず成にけるかな。

三

我神よ、

人やけものにおとるらん、
つとめにたゆむ世をみれば
犬こそ人にまさりけれ。
夜も日もいさみいそしみて
あはれケレブがまもりしも、

昔むかしとなりぬ家の門かど。

一五〇

ケレブよ、ケレブよ、
汝なれなくて

花はなのさく日も、月つきの夜よも
門邊かどべさびしく成なりにけるかな。

山 墓

今いまは此この世よになき子ことて

まよふ暗路やみちはたどらねど、

谷蔭たにかげくらき杉林すきはやし、

岩間いわまの水の音さむし。

柴しばかる賤男しつなを、落葉おちばかく

處女をこめが袖そでもまだみえず、

我われたゞひとり峰みねの墓はか

のぼればのぼる朝日あさひかな。

一五一

まだあたらしきおくつきの
小杉のかこみ、松の門、
白川真砂しく路に、
のこるはうきのあと清し。

四
手向の水も、さす花も、
ともにかれたる竹の筒、
しるしの石に失せし子の
その名をみるもはかなしや。
五
子を得て、父となれる身の

子を失ひて天つ父、
したふもふかし、袖の露
おつればおつる木の葉かな。

六
母にわかれし時だにも、
かくは泣トといひながら、
泣にし妻の花衣
たもとやいまもしぐるらん。

七
落葉かきわけ去年のけふ、
柩おさめしあとみれば、

土たかまりてみどり子の
ねたる姿に似たるかな。

八

冬がれにける草の床、

苔むす岩の枕べに、

残れる菊はねふる子の

つみてあそびし花なるか。

九

小笹が垣はおく霜の

さゆるもしらぬ閨の戸か、

散かさなれる紅葉は

かけし錦の小袢か。

母にかはりてみどり子の

ねふりまもりて子守歌

うたふは誰ぞ、山松の

梢にきなく小鳥かや。

十

うとふ小鳥よやよまて

我もうたはんやまと歌、

冬の日影ものどかなる

松にとまりてきけよかし。

十一

「東山むかへばみゆる
みどり子の面影はらへ
峰の松風」。

十二

「東山落葉かきわけ
みどり子をうづめし塚に
ふる時雨かな」。

十三

「東山木の葉のちるも
淋しきに手向の菊は
かれてけるかな」。

古英雄

一緒言

和歌の浦の千歳の松も
しら浪のしらぬむかしを
誰にかも我はとはなん、
濱千鳥あと消やすき
砂の上に宮居つくりて、
いのるともかひなかりけり
玉津島姫。

天地に満る美の神、
詩歌の神、聖靈の鳩の
み翼にダンテ、ミルトン
のせしごと我をものせて、
ゆきませとねがへばやがて
目の前にあらはれにけり
猶太の國原。
岩はしるヨルダニ川の
川風に岸の柳の
うごくとおどろく魚の
たちまちにしづむも深し

千尋の青淵。

高櫓木の間にみゆる
椰子の邑、エリコの城の
大庭に飼馴されし
小男鹿のなく音も長し
七里の白壁。

ギルガルの岡よりいで、
葡萄園宵くあらす
小狐のふしどやいづこ、

さく百合花のたてるも高し
十二の石塚。

二荒野

エリコの城はみえねども、
ヨルダニ川の瀬の音は
ちかく聞ゆる古塚の
椰子の木陰に休らふは
母にやはあらん、その子かも、
十二の石をゆびさして、
「誰の紀念ぞ、こは何ぞ、
其故あらばしらまほし

をしへたまへ」と問ひし子の
顔みてるみつ、たらちねの
母のうれしさ岩がねの
草に腰かけ、ヘブライの
母のつねとていにしへの
神の恩の物語
静にかたりさかせけり。

母

「天地創造る神の友、
信仰の父、アブラハム、
イザク、ヤコブの昔より

イスラエル人住馴し
牧場もあとにエヂプトの
くらし國をばいでしとき、
ヨセフをしらぬ國王の
追ひやきにけん後には
軍車の音ひいき、
前には荒き紅海の
浪はさけびていまさらに
かへるもゆくも途たぬて
民みなおそれをのゝきぬ。
子

「母よその時いかにして、
神は民をば救ひしぞ」
母
「神は夜嵐ふきおこし
浪をふたつにたちわりて、
かわける路をあら海の
底にあらはし我民を
向の岸に渡せしが、
あとにつける夷等の
軍車も、焼太刀も、
鉛の如く大波の

底そこにうちこみたまひけり。

「母ははよその時とき我わが民たみの

いかにうれしく思おもひしぞ」

母

「あはれ我わが子こよ汝なれもしる

モウセの歌うたをうたひあけて

處を女めが舞まへば磯いそ浪なみも

うつや鼓つづみの音ねたかし。

いまや荒野あらのに朝露あさつゆの

とくおきいで、鶉うづらかり

マナをあつむる民草も

なびく山風やまかぜ、電光いなびかり、

空そらとゝるかし鳴神なるかみの

エホバの峰みねをあはとみて

かしこみたちぬ、雲間くもまより

さすや日影ひかげのどけくも

花野はなにあそぶ蜂はちの蜜みつ、

牛うしの乳ちちさへ岡おかのべに

ながるゝ國くには我わが國くにと

契約けいやく重おもくいや高たかき

雲くもの御柱みはしらゆけばゆき、

かへればかへる大御箱、
 神のまに、司人
 貝ふきならし、武士に
 弓とりもたし、二つらに
 わかれつらなりねりゆけば、
 妻は子を、負、老人は
 杖つきたて、おくれと
 いそぎすゝみて、敵の邑
 ふみあらしつゝ、山といふ
 山をば越て、河といふ
 河をば渡り、四十歳の

ながき旅路もはてけり。

三石塚

「荒野の旅ははてにしが、
 あしき民草生しげり、
 あはれモウセは契約の
 地をもふまではかなくも
 此世にあらずなりにけり。」

子

「母よモウセはヨルダニの
 河もわたらで永眠しか。」

母

「終にモウセはなつかしき
 カナンカナンの國くにの山やまのすゑ、
 水みづの行衛ゆへはみたれども、
 モアブモアブの野のにて身みまかりぬ。
 いまやエリコエリコの都みやこより
 二人ふたりの使者つかひかへり來きて、
 敵あだの本城ほんじょうもその路みちも
 しられにけりな、唐錦からにしき
 旌旗はたひるがへし雲くもなして、
 槍やりと槍やりとは朝日あさひさす
 林はやしのごとく、くるがねの

楯たてと楯たてとは岩垣いわがきの
 かたくつらねて、武士ぶしの
 ますら武勇ぶゆうは大將いくさき
 ヨシユヤのあとに従したがひて、
 ヨルダニ河がはの河岸がしに
 たちならびたる折をりしもあれ、
 百雷ももいづちの落おちること
 とゝるきし瀬せの音ねもたぬ、
 千尋ちひろの淵ふちの底そこみわた
 ひだりみぎりにしらなみの
 立たちわかれつゝ一筋ひとすぢの

途ぞいできぬ、司人
荷ふ黄金の大御箱
てらす御前を通んも
かしこけれどもいまはとて
十二の族つぎく
河をわたりぬ、大將
ヨシユヤの御命いと重き
石をゑらびて紀念塚
きづきおきなば後の世の
人のこゝろもヨルダニの
河流をせきし我神の

今日の恩を百世にも
千々の年にもかくながら
いやとこしへにいひつぎて、
傳んためぞ族より
とく一人づゝいだしねと
いへばそのとき我族
ベニヤミンにてゑらみしは、
いと奇しくおもふらめど、
今は世になき父なりき。
されば十二の人たちは
淨き石をば青淵の

ふかき底より荷ひあげ
一つの塚をひんがしの
水畔にたてつ、またさらに
十二の石をゑらみとり、
今も我子よ古柳
なびくあたりをよくもみよ、
根白高がや生茂る
西の岸よりさゝげ来て、
この石塚となせしなり。
いざやきけかし昔こそ
うたてかりけれ賤の男が

渡る野川の石橋と
なされしみれば日の神は
男神なりけん處女子が
つとふ岩井の蓋石と
なされしみれば月の神
女神なりけん森の蔭
野路の芝生石像の
たゞざる里はなかりしと
いかに我子よ我神の
いかりたまふも宜ならずや。
さればヨシユヤはいさみたち

エリコの都、アイの城、
白浪さわぐガリラヤの
海邊の舟も洞にすむ
北山蔭の敵までも
焼打なしつ、こゝよりは
雲井にみゆるヘルモンの
遠山の端の雪のごと
國清らかに治まりぬ。
ユダの族のあけがたに
ひとりきらめく星なれや、
横雲消ていづる日の

光のうちにかくれたる
ヨシユヤの遺す法典のごと
たゞ一卷につらねおかば、
十二のさつ矢折るものは
なかりしものを思ひきや
ヤコブの族おのがしゝ
住家もとむと峰に入り、
谷にかくれて、たちまちに
わかれくにならんとは。
春のなが雨の時すぎて、
夏もなかばとなりぬれば、

千草の花もかれはてし、
青葉もしばむ水無月の
照る日くるしきアラビヤの
荒野の風のおととのみ
さゝにしものを、人馬の
あゆみのひさきいや近く、
ヨルダニ川のあなたより
浅瀬わたりて襲ひくる、
モアブの國の野牛てふ
エグロン王をふせぐとて、
我族よりむらぎもの

こゝろふりおこしいと澤に
丈夫いでぬ思ひみよ
秋の山路の菊の霜、
冬の岡邊の松の雪、
みだれ世にこそ忠臣の
名をもしらるれそがなかに
汝が父殊にたけかりけん、
太刀風あらくあら浪の
よせ來るごとにうち碎き、
追かへしつゝ岩岸の
かたくもたちてあまたゝび

戦ひたまへど、高櫓
たをるゝときに一本の
柱のいかにさゝゆべき。
あたり見廻し今はとて、
両刀の劍とりいで、
僕をまねきいひけらく、
「こは短かくも我家に
ながく傳ふる形見とせん、
またもや敵のよせきなば
われはや死なむ、やよやとく、
こゝをのがれてかならずも

妻子にこれを渡せかし。
さらば「とさゝてかなしくも
袖の露のみおちこちに
うたれし軀よこたはり、
血汐ながれて鎗もをれ、
楯もうもるゝ沙の上に
僕はふしてかしらさへ
しばしえあげず居たりけり。
かくてははてと歩みより
言葉せわしく更にまた
父はいへらく「やよ僕、

ときおくれなばかひぞなき、
 ましてや汝は奴隸なり、
 ながらへばとて耻もなし。
 また神の爲、國の爲、
 盡さんときのなきことかは。
 とくたゝずや主と共に
 死ぬるばかりを忠とはいはト
 かへりゆきね」と御言葉も
 その理もいやたかき
 かさねくの仰せをば、
 いなみ得ずして寶劔を

腰にとりはぎ、うしろをば
 みかへりくゆく僕
 山路にみえずなりにけり。

子

「父はその後いかにせし、
 猶もたゝかひたまひしか」。

問はれて母は胸せまり、
 何といはねにさく百合の
 花の露とはいひ消せど、
 いつしか袖ぞぬれにける。

「なき父君は今はしも
 こゝろ安しとあげどきの
 聲すさまじくヨルダニの
 谷にひゞきて兵馬の
 足並とゞのへつぎくくに
 軍車をおしいだし、
 植つきならべ射矢なす
 早瀬わたりてモアブ軍
 せめくるなかにきり入りて
 みえずなりしが砂烟

立いでたまひし御姿の
 すぞくもあるかな右左
 二人の敵兵をわきばさみ、
 あはやけわしき岸邊より
 とぶよとみれば音たてゝ
 みどりの淵にしづみきと、
 敵も味方も言傳ふ。
 されば我子よ椰子の邑、
 エリコの城のモアブ王
 エグロンこそはかなしくも
 父と國との仇なれ。

また此塚はありし世の
神の恩の紀念なり。

ゆめわすれなといひをはり、
岩根をたちてなき父の
墓に手向の花なれや、
百合をば手折母と子が
手に手をとりにてギルガルの
岡べにしげる無花果の
青葉がくれをかへりゆく。
こはベニヤミンの族なる
ゲラの獨子エホデにて、

まだ九歳のころなりき。

山里

萬の黄金千々の珠、
國の貢をさしげゆく
御使なればなほざりの
旅路ならずと僕みな
一間につとひ三日月の
かくるゝしらで山の端の
をぐらくなるはもしやまた
雨もよひかたと窓をあけて、
みれば空には雲もなく、

星かゝやきてゐたりけり。
明日の旅路やあつからむ
夏の日影にてらされて
面やかすなよ、道のべの
清水みつけて手にむすび、
のみつゝゆかん今宵より
その手を拭ふ手拭は
枕べちかくよせおけと
さけびあひつゝ大かたに
旅のそなへや果にけん、
庖厨のかたは寝しづまり

厨の聲ぞたかゝりける。
時にエホデはなき父の
紀念の劔かくしもち、
ひとり忍びて屋の上に
のぼる階よりみおるせば、
燈の影さらくくと
窓よりさして中庭の
木の葉のいろのあをやかに
なびく麻蚊帳すきとほる
卵の花いろの白がさね、
玉の帯さへまだとかず、

夜床のもとにたゞひとり
ひざかりふせていませるは、
母にぞありけるア、神よ
我イスラエル罪あらば
その罪ゆるし今も猶
エグロンつよき手のあらば
その手をくつき、國民を
救ひたまへと祈るらし。
いのりのすえにかならずも
我身のことをくはふらむ、
かたしけなさにせきあへず

落るなみだは露なれや、
袖ぬらしつゝ屋の上
のぼりてたてばむば玉の
夜やふけぬらむ苦むせる
垣ねの路に立犬の
遠聲いとゞものすこく、
鳥はふ壁をはなれいで
蝙蝠ちかく飛かよふ。
高屋が上を立あるき、
エホデひそかに思へらく、
すぎにし事はかねてより

母のつげさせたまふにて、
我よくしりぬ、あはれ我
二人の親の思ひ子と
うまれてなにもしらぬ間に、
父は身まかりたまひけり。
嗚呼悲しきかな、そのむかし
山路をめぐり寶劔を
さゝげかへりし僕まで
今も父をばなつかしみ、
神のためとて青淵の
底にしづみし玉なれば

をしとはいはで音になきぬ。
嗚呼悲しきかな、その後
石か、枯木か目はあれど
頭頂にとまるむら鳥を
おひもはらはす手はもてぞ
膝間に萌出る青草を
ぬきも得やらぬ偶像の
世とはふたゝびなりしとぞ。
嗚呼悲しきかな、今宵はや
明日にあけなん國の敵、
父の仇も神の爲、

刺にさゝれず、いくぞたび
形見の劔ぬきみても、
猶ぬきみまほし月夜、
何をいのるか白露に
ぬるゝ履をばぬぎすてゝ、
神の御前にひざまづき
ひとり黙してゐたりけり。
ふもとの里の庭鳥の
八聲もはてゝ、天の戸の
いつあけにけん極櫓の
木の間にみゆるエルサレム

ふりぬる城の石垣に、
さし昇る日の影をうけて
神殿の軒端にゐる鳩の
翼かゝやくあしたかな。
門みおるせば僕らは
はや貢物荷ひいで、
大路せましと並ゐたり。
さればエホデは寶劔をば
ことさら右の腰にさし、
上衣のしたにかくしもち、
高屋をくだり今はとて

別るゝときに「やよエホデ、
腰の寶劔にこゝろせよ」と
母はいひつゝ氣高くも
おくにぞいりぬ子を思ふ
鶴の一聲武男の
こゝろもいとみだれ芦の
葉がくれみれば、かなしくも
かへらぬ水の底深み、
底のおもひをいかにして
母やしりけんしかはわれと
神にまかせて貢物

荷ふ僕のさきにたち、
エホデは遠き椰子の城、
エリコさしてぞいそぎゆく。
そもエリコなる古城は
ヨシユヤの時代に亡され、
野獅子、山猿住家なし、
荒鷲、梟聲たねぬ、
椰子の林とあれにしを、
十八年のそのむかし
エグロン王は岩はしる
ヨルダン川の川原にて

敷石ゑらみ、レバノンの
谷よりほこぶ榎柱
ふとしく立る大殿の
ひろき天井のこりなく、
エジプトの書をきざむとて、
イスラエルより襟の珠、
指環の黄金うばひとり、
つくるもあはれ新城を
ふたゝびこゝにたてしなり。
五 都城
木の間にみゆる白壁も

まだあたらしき大城の
正門まぢかくなるからに、
貢の重荷おろさせて
塵うち拂ひ汗ぬぐひ、
暫時エホデは道のべの
葡萄の棚下に涼しくも
皆僕等をいこはせて、
やがて正門の鐵門にゆき、
案内をこひて、門守の
後よりゆけば門毎に
槍をよこたへ、楯をもち、

兵士あまたたちならぶ。
 いなゝく軍馬の立つみれば、
 戦車を備へたる。
 廣庭過て大殿の
 御階の下にいたりしに、
 エグロン王は御座にあり、
 ちかく侍ふ勇士は
 狼のごとみかへりて、
 蝮のごとく疾視たる
 面様こそはおそろしけれ。
 白き山羊の皮きたる

狼ならずは、くれなゐの
 いばら花さくそのにすむ
 蝮とやいはむ、からにしき
 身にしまとへばなかくに
 夷の風体を見せさる。
 いかにもなして御座ちかく、
 のぼらん物と捧げこし
 國の貢物の奇き玉、
 黄金ならねど千々に思ひ、
 萬にこゝろくだけども、
 せんすべもなみ、しかはあれど

エグロン王にいと厚く
欸待されしを僥倖として
エリコの都いでにけり。
時にエホデのいひけらく
「我猶思ふことあれば
暫時こゝにとまらん、
とくながともはかへりね」と
いとねむごろに仰せられ
なか／＼おもひわきがたく、
御顔の色もたゞならず
見ゆる物からどこまでも

まげて御供いたさんと
いらへ申せど「とく行け」と
いきまきたまへは僕等も
皆家路にぞのぼりける。
空とぶ鳥もねぐらとる
椰子のはやしにわけ入れば、
夏野の原に咲百合の
賤が朝餉の煙とも
明日は消えなむ花ながら、
これにくらべは宮人の
袖のにしきも光なし。

しかはあれどもいまさらに
物思ふ身は花鳥の
あはれもしらず何時の間に、
人里遠くなりしにや。
近く聞ゆる溜水の
音におどろきながむれば、
はやギルガルの岡に来ぬ。
看れば十二の石の塚、
聴けばヨルダンの波の音、
いづれにしても父君の
昔をしのぶ我神の

舊恩を思ふ便りなる
椰子の葉しげる古池の
ほとりの草にうちふして、
「ア、我神よ、モアブ王、
野牛ににたるエグロンを
たゞ我父の敵とのみ
おもふことなく、國民の
かたきとばかりおもはせよ。
名利の念をうち消して、
まことの勇氣たまはれ」と
祈禱おはれば、かしこくも

神の聖靈や光臨けん、
再びエリコにはせのぼり、
御階のもとにて國王に
つけ申すべき秘事あり、
人をしりぞけきゝたまへ、
いと幸福あらんあはれとく
このよし聞おあげられよと
いへば侍者おくにゆき、
やゝ時過ぎていで來り、
いざこなたへといざなふて、
御階を昇り庭にいで、

ながき廊下すぎゆきて
涼殿まで案内なし、
もと來しかたへぞかへりける。
芭蕉の廣葉ひるがへし
吹入る風の涼しさに、
エグロン王は北窓の
隙戸おし開き藤牀に
猶うち臥して居ませしが、
神の御命といふ聲に
うち驚るきて起きながら、
身をかへす間に上衣もて

おほひしみぎの腰よりぞ、
あはや左手に寶劔をば
ぬくよとみしが、はや王の
胸板ふかく刺通し、
鎧脊にあまりける。
菅のまくらも眞白なる
かやのむしろも、くれなるの
血しほに染て凌すさましく、
げに肥へふとる赤牛を
屠るが如し、思ひきや
ベニヤミンなる族には

多しときけど、エホデまで
左手利捷にて我神の
奇しき器とならむとは。
エホデひそかに立いで、
涼殿の戸かたくとち、
廊下づたひ庭をすぎ、
御階くだれば夏の日の
午の暑熱のたへがたく
睡りやすらむ護衛兵、
楯をまくらに、槍をすて、
ところくくに居たりしも、

みとがめらるゝこともなく、
城の門外までいでにけり。
たゞちに椰子の林より
はやしに入りて、西山の
すそ野の原にかけゆけば、
「何事ぞや」と羊牧者、
顔み合せて行先に
立ちふさがりぬ、我エホデ
今日エグロンを刺してきぬ。
いまよりゆきてエフライムの
ますら武勇らかりあつめ

今宵エリコにくだるべし。
とく汝等も野に山に
腰の角笛ふき鳴し、
我族より殊更に
民兵多くよびあつめ、
岩浪あらしヨルダニの
津にくだり川上の
浅瀬をゑらみ、石をつみ、
砂をはこびて、行水を
せきとめおきて、敵人の
わたるに便利よくなさは、

なかくくしき功あらむと
またかけ出し山路より
山路にかゝりはせさりぬ。
これをばきゝて羊牧者
かたみにいざといひかはし、
分れちりしが遠近の
峯もどよみて吹きたつる
角笛の音に山彦も
聲うちそへてすさまじや。

六 溪流

午眠はてけん御垣守、

二人いで来てみぎひたり
立分れつゝ廊下の
敷石の上を立ありき、
「いま涼殿を見廻りしに
人聲もなく戸は閉たり、
はや青年はかへりしや」と
問へば一人がいらへして、
「いつかへりけんしらねども、
王には猶も神言を
獨りおもふて居ますらむ
さなくば例の午睡して

國くににのこし、姫君ひめぎみの
夢ゆめやみるらむ、やよやみよ、
西にしの高峯たかねに日はいりぬ。
とにかくけふはおそからずや、
みゆるしなくも涼殿すずみどの
いぎ明あてみんと立たちよりて
楯たてと槍やりとはかたはらの
一人ひとりにわたし、慎まきの戸どを
おしあけみれば、蟬せみの羽はの
うすき御衣みぎぬもしろかねの
おん冠かんむりも、血ちにそみて

軀むくろはしたにたをれあり。
こはそもいかにとかけ上あり、
巖いわしくならず高樓たかどのの
鐘かねのひびきに「何事なにごと」ぞと
あわて噪さわぎて、おく庭にはの
涼殿すずみどのへとつどひ來きぬ。
をりから聞きゆる鯨波あひどきの
聲こゑはまさしくイスラエル
せめや來きつらむ門守かどもりを
とくくめして問こたはずやと
喚よほる聲こゑも果はてぬ間まに、



夜風はげしく火はいでよ、
殿より殿にもえうつり、
城は燔となりけり。
烟をくさり火をふみて、
エホデはさきに進み入り、
るらみうちして敵びとの
にぐるを追はず戦ひぬ。
そのひびきには山もさけ、
その猛火には空もこげ、
エリコの城はうつせみの
この世ながらの地獄にて

みる間に灰とぞなりにける。
さてのがれゆく夷等の
かへり見すれば山の端に
いる弓張の月影の
こゝろぼそくもたどりゆく。
夜路おくらしやうくに
津をたづね川岸に
おりたちみれば水浅し、
今宵の僥倖はこれのみと
なかば渡りしかりしもあれ、
石のくづるゝ音高く

よせくる激浪にながされて、
岩にくだかれ叫びあふ
ソドムゴモラもかくありけん。
これよりさきに川邊まで、
敵追下しひそかにも
エボデはいそぎ水上に
積にし石をくづさせて、
又岩岸にのぼりたち、
角笛たかく吹ならせば
いくらともなくたきいだす
蘆火の影のきら〜と

波にうかびて敵人の
行衛さやけし名にしおふ
死海のうみに潮かせの
からもとよめずしづむらん。
西の岸にはイフライムの
勇士多く椰子の葉を
かたに荷ふて、ひんがしの
岸にはあまたベンヤミンの
武夫たち、橄欖の
枝を手にもち、年少き
エボデをあけて國民の

士師とあふぎつゝ、
モウセの歌を三たびまで、
うたひあげたるよるこびの
聲猶淵に残りけり。
皆もろともにエホデをば
ゲラの家まで送らむと
山邊を遠く見渡せば、
夜もほのくくとあけにけり。

七 後序

朝日影さしむかひたる
ギルガルの紀念の石の

あたりより群たつ鳩の
はるくと東の空に
ゆくぞあやしき。

やよやまて翼にのせよ、
山鳩よ猶太の國の
いにしへの神の恩恵を
つげんため我もかへらん
うらやすの國に。

(明治十八年九月作)

明治三十五年八月十九日印刷
明治三十五年八月廿五日發行

不許
複製

發兌所

大阪市東區南本町心齋橋筋角

金尾文淵堂書店

著者 湯淺吉郎

發行者 大阪東區南本町四丁目三十六番屋敷 金尾種次郎

印刷者 大阪東區鑄屋町二丁目七番屋敷 江間傳三郎

印刷所 大阪東區本町一丁目三十番邸 株式會社 大阪國文社

半月集 附

金三十五錢

文藝圖書一覽

發兌元

大阪市東區南本町四丁目(心齋橋筋角)
金尾文淵堂本店
(電話東區七八)

新刊圖書

芝 肴
半月集

薄墨の松
蟬しぐれ

七日間下篇
蕪村(塑像)

尾崎紅葉氏作

芝肴

武内桂舟氏畫

芝肴目次

- 令夫人……………三章
- 倭字……………
- 胸算用……………
- 電話とビスケット……………
- 黒 紬……………四章
- 藪なる哉……………
- 金 盃……………
- 藥 禮……………

寸價郵
珍金稅
頗五金
美拾四
本錢錢

文淵堂の業務要項

出版
弊堂は専ら文學宗教書類の出版に従事し、材料の精選と印刷装釘の鮮麗堅固を期す、聊か世の出版業者流と其撰を異にするを信す

原稿歡迎
故に親疎不拘、紹介の有無に關せず、著者の聲名を以て其相談に應ずべし、希くは大方の諸賢幸に高顧を玉へ、其世に裨益ありと認るものは何種を不論之が出版を爲すべく、尙原稿を送附せらる、場合には返稿返信及書留料を添附し、原稿は必ず書留郵便を以て送らるべし、定期刊行物に對するものは各其規に従ひ玉ふべし

印刷製本
弊堂は引く各種の製版印刷經驗と便宜のあるを以て、今後之が調製の引受を爲し、余力の盡し得る限り、大方の便宜を計らんとす、其手數料の如きは、類々、少く、其費の範圍を以て應ずべきを以て、此事に經驗なき人には、價格の安廉と非常なる便宜とを與ふべきを信す、其要項左の如し

活版木版寫眞版コロタイプ版石版銅版の印刷書籍雜誌其他の印刷製本、和洋各種の製本

賣買
弊堂は百餘の書籍雜誌の發賣に従事し、其新古を論せず、弘く之が需要に應ず、尙各地出版者の其發賣方を托せらる、あらば懇切に非常なる勵精を以て之が擴張を計るべし

注文注意
弊堂に注文せらる、方は著者書名冊數其他の要項を尤明瞭に前金を以て、玉はんを要し、問合は返信料の封入を要す、取調の正確にして、百餘の書の調はざるなく、迅速に大方の便宜を計るべく、定期刊行物の發送は尤正確迅速を期すべし、送金は銀行爲替、郵便爲替(受取人欄内に小店名の記入を要す) 郵券代用(一割増)各種其便宜に従ひ玉ふべし

市内注文
は電話、端書にて報せらるれば、即刻配達、大方の便宜を計るべく、(乙)宗教書目(丙)百餘の新古書目は近日發刊すべく、本書と共に二錢宛の郵券封入者に送呈すべし、其他書籍商百餘の業務は尤も懇切正確に勵精すべく、爰に伏して大方諸賢高顧を希ふ

米光關月氏作

薄墨の松

大阪毎日新聞募集第二等當撰

先年大阪毎日新聞が賞を懸けて小説を募集するや應ずるもの數十種、選者の嚴正なる審査により當選の榮を荷ひし好小説二個、第一等は中村春雨氏の『無花果』にして曩に弊堂が美裝して刊行せしもの、幸に大方の賞揚を受けて五版を重ねるに到れり、而して第二等は實に米光關月氏の『薄墨の松』、本書乃ちこれ也、材を先人未發の境に取り、着想奇拔、筆致清婉、近來の佳作として推すを躊躇せず、刊行近きにあり、清榻の下一讀の榮を給へ、

製金郵
本參稅
頗拾金
美五四
麗錢錢

中村春雨氏作

無花果

一條成美畫
金四拾五錢 稅郵六錢

萎靡沈滞せるわが文壇に聊か貢獻する所あらんと目的を以て大阪毎日新聞が曩に金五百圓の賞を懸て小説募集したるは天下の已に知る所なるが、多數應募の佳什の内撰評者坪内博士、尾崎紅葉、幸田露伴三大家の審査に依りて第一等に當撰したるは春雨氏の無花果也、此作は在來の陳腐なる舊套を脱して材を宗教に取信仰と人情の衝突家庭と社會の接觸より生ずるあらゆる悲劇が良好珠の如き女主人公の温情と希望と真心の復活とに依りて遂に和氣靈々たる樂天地となりゆく、光明小説にして同時に家庭に於ける良好なる讀物なり子弟も讀むべく父兄も讀むべく、教育家も宗教家も共に熟讀を價するもの也

短篇小説 雛

鳩

色刷挿畫九葉
金四拾五錢 稅稅六錢

春雨氏得意の短編二十有餘種を蒐めて、雛鳩と題す、皆往年苦心の作也

次目

- 子蘭盆會 (小説) 全上
- 吾種妹 (小説) 全上
- 雜羽子浪 (小説) 全上
- 片男 (小説) 全上
- 追子 (小説) 全上
- 廢村落 (繪畫哲學) 全上
- 繪畫哲學 (繪畫哲學) 全上
- ちぎれ文 (繪畫哲學) 全上
- 天橋 (繪畫哲學) 全上
- 自然詩人 (繪畫哲學) 全上
- 尼のゆくへ (小説) 全上
- つゞれの錦 (小説) 全上
- 浮城 (小説) 全上
- わが罪 (小説) 全上
- 三本松 (小説) 全上
- 鐵道馬車 (小説) 全上
- 鐵道山車 (小説) 全上
- 鑛脈 (小説) 全上
- 月の船 (小説) 全上
- 病犬 (小説) 全上
- 全上 (小説) 全上
- 全上 (小説) 全上
- 全上 (小説) 全上

菊池幽芳氏著 坂田耕雪廣瀬勝平阿氏書

再版 小説 七日間

上下全二冊 各一冊 四拾錢 郵稅各四錢

こゝに最も美にして最大膽なる最も狡猾にして最も機敏なる絶世の二佳人あり六尺有餘の男子一楸一餅せられつゝ相共に生死の境を彷徨す讀むもの心膽を寒ふせずんば止まず讀者を徴せしめその最後まで讀了せずんば安んずる能はざらむるもの蓋し本編の如きは無からん

菊池幽芳氏著 下村爲山氏新意匠空前の美裝

再版 よつちやん

コロタイプ版數葉 金四拾錢 郵稅四錢

よつちやんは今年五つの女の兒で著者菊池幽芳君の令嬢ですが少一の虚飾もなく眞率なる温かき同情の筆を以てその平生を詩的に書れたるものでよほど趣味の深い冊子です兒童研究に志ある人には善き參考となり世の母たり妻たるものには如何ほと興味深く感ぜしむるでせうか恐らく一度この本を讀いたものはよつちやんの面影を長く思れることは出来ませうこれにこの冊子の體裁の可憐に美しくい事はたかに出版界を驚かすに足るべきものと固く信する處です

高安月郊氏著

三連劇詩 其の第一

重盛

製本高稚美麗

金參拾錢 郵稅金四錢

中村不折畫 社會小説

金字塔

金四拾錢 郵稅金四錢

新體詩集

夜濤集

金四拾錢 郵稅金四錢

方今北歐の劇詩人イブセンを言ふもの多しイブセンを言ふ者は『イブセン社會劇』の譯者たる高安月郊氏を知らざる可からず氏平生鴨水の涯りに高臥し名聞を當世に需めず與會すれば乃ち筆を呵して文を成す蓋し騷壇稀に見る高風の士なり上記の三著は氏の作劇詩、小説、新體詩集にして想は雲の如く高く筆は風の如く勁く人生に就いて疑問を有するの士は必ず一讀せざるべからざる也

薄田泣菫氏新體詩集

ゆ く 春

製本頗美麗
金四拾錢 郵稅四錢

これは薄田泣菫氏の長短五十篇の新體詩を集めたるものに候挿畫には満谷國四郎君の彩筆になるコロタ
イプ版數葉ありヘエジの色刷輪廓は工學家松尾素濤君の新意匠に成り候へば見ては眼に美しく讀みては
心に清き慰藉と理想を與ふべしと信じ候書肆は斯様の書を諸君に勸むるに遠慮を要せずと存し候

暮 笛 集

製本頗美麗
金四拾錢 郵稅四錢

暮笛集の三版は体裁を改め工夫を凝らしたる新意匠を以て現はれ候卷中の詩も作者少なからず朱を加へ
候ゆる自然面目を新たにしたるもの有之候はんと存し候世の事物の日を経れば陳くなり行くが中に詩歌
のみは常に新らしく美しく候幸福なるは詩集を携ふる人と存し候ま、書肆は諸君に暮笛集を勧め候

湯淺吉郎氏著 湯淺一郎氏畫

新體 詩集 半月集

製本頗美麗
金參拾五錢 郵稅四錢

半月集は出でたり
本書はヘブリウ學者として有名なる半月湯淺吉郎氏の詩集なり氏が明治新體詩史に缺く可から
ざる位置を有するは夙く己に「早稲田文學」記者の評せし所本集に藏めたる古英雄の如きは外山井上諸
氏の一新體詩鈔に先づ數年の創作にかゝり材を舊約の傳説に採り英雄エホダの事蹟を歌ひたる叙事詩
にして無慮千行聲調壯麗雄渾汪洋とて大河の海潮に注ぐの概あり眞個明治詩界破天荒の大作として許
さる可き也此他行高なるものには天地初發、黃泉門、七雷、神子と覺王あり温籍なるものには愛犬、天
然、新婚旅、秋田家あり滑稽なるものには百猿舞あり猿に寓して諸體百出諷刺の妙を極む民衆が信仰思
想の喧しく論ぜらる、今日基督神學者として深遠の智識を有する氏が新體詩集を得るは徒に詩壇の幸福
のみにはあらざる也表紙畫挿畫は氏の令甥湯淺一郎氏の彩筆に成り詩と相俟て幽麗の妙を極む

月刊 詩集 春 く さ

郵稅共 金拾五錢

第一集には佛國プレトンの畫を口繪に、十葉の色刷畫を挿み、薄田泣菫、三木天遊、高安月郊、山本露
葉、桑田春風、河井醉茗の長短の新體詩十二編と水落露石の俳文とを蒐む

與謝野晶子女史著 藤島武二氏書

詩集 みだれ髪

体裁 珍奇美本
金三十五錢 郵税四錢

構想に格調に變幻百出して、獨創の奇才優に新詩壇の一生面を開き、之に盛るに紅恨紫意炎々懊惱の熱情を以てするものは、我が國女史の歌にあらずや。我が藤島先生の書又最も進歩せる獨得の筆致を以て、最も清新なる特長の趣味を發揮せらる。日本刻下の文藝界に於て、能く最新、最美、最高の思想を代表せるものは即ち本書歟。

與謝野鐵幹氏著

紫

一冊 金三十五錢
郵税 金四錢

『太陽』記者大町桂月先生本書を評して曰く、『予輩は、在來の和歌に嫌らざるもの也。鐵幹此際此際崛起して思想に格調に用語に、すべて古人の範圍を脱し、一生面を開きたるの新氣運は、後世より見るも、短歌史上の一大變遷也。鐵幹の短歌、奇才横逸、毫も舊臭を帯びず、毫も古人の糟粕を管めず、其獨創の才、殆んど其比を見ず、鐵幹出づるに及んで、短歌の將來なほ有望なるを覺ゆる也。』と今や國時革新の潮流類る急なるに當り、江湖の才人乞ふ本書に依つて更に發明せらる、所あらむことを。特に歐米の『珍本』を參酌して、奇拔なる製本の體裁、先づ人目を一新せしむ。

浩々歌客氏著 下村爲山氏表紙畫

文學 雜著 出門一笑

金參拾錢 郵税 四錢

文學 雜著 詩國小觀

金四拾錢 郵税 四錢

新案美術繪はむぎ

七枚一組 金貳拾錢 郵税不要

芝蘭集

金貳拾錢 郵税 四錢

『老僕とわれ』『野花』『風頭語』『賣花翁』等小品文數十を果て一篇無韻詩といふべきものなり紀行あり『讀』『岐名勝』の如きは好尚詩趣に富める讀岐の案内記なり『向上一路』『寄行』『句花』の如きは人生觀のある所を見るべし蓋し著者の詩想は理趣に繞むを以て長と一抽象に過るを以て短とすその人生と自然に涉りて一味の詩致感興深きは今日の文壇に在りてまた一家獨得たるを失はずといふべし卷末に康有爲の大同大平論あり南海の哲理の一斑を紹介したるものなほ著者が理を好む所を見るべし(大坂朝日新聞批評)

詩國小觀は趣味津津たる散文と韻文とを蒐めたる冊子也思想の健全なる著者の如きは當代の詩壇稀に見る所此書を讀む者は其評眼を窺ひ知ると共に清壁流麗なる描寫に田園の詩趣を味ひて別乾坤に遊ぶの思あらん

此繪葉書は洋畫界に名高き満谷畫伯の彩筆に成り紅顔花の如き少女に配するに春秋夏冬各季の花鳥風月を以てしたるもの考案の斬新色彩の豊麗彼の歐米繪葉書の優品に比して毫も遜色を見ず以て風流なる紳士貴女諸君が好事の用に供するを得んか

信仰、希望、長短、最幸、最非、天然、季節、人物、人品、聲色、書籍、花木、動物、器具、題、銘の各欄にわかちて友の面影を一頁にのばしむる新案の金蘭簿也

水谷不倒氏著 ●口繪 土佐光起筆菅公神像古畫五十度摺木版極彩色

菅公實傳

坂田耕雪氏大版挿畫四葉
金參拾五錢 郵稅 六錢

本書は大坂毎日新聞の紙上に連載して喝采を博したるもの、大阪毎日新聞社は之を其紙上に掲ぐる爲に著者をして殆ど半歳を費し其材料を蒐集し且つ菅公の遺跡靈社等を遍歴せしめたりといふ、宜なり近來菅公傳の著多く世に出るといへども本書の如く事實の正確にして詳細を悉したるは稀なり、殊に著者は坊間流布する菅公傳の硬文にして普通の讀者に解し難く偶々文章の平易なるものあれば簡畧に失して有觸れたる事實の外公を知り由なきを遺憾とし本傳を綴るには事實を史傳の正確なるに徴し而も乾柴無味に流れず行文は平易明快を主とし學者も繙くべく無學者も手にすべく婦女童幼と雖も敢て難解を覺はざるに努めたるは本傳の特色にして菅公の事蹟を洽く世に紹介するに於て本書の如きは殆ど遺憾なしといふべきか
梅澤和軒氏著

菅公論

金參拾錢
郵稅 四錢

本書は菅公論の殿なり所論的確老吏獄を斷するが如く其井上高山大町諸氏の所説を批判す從横所説を批判せる眞に文壇の逸品なり今や菅公の一千年祭は來らむとす右流左死の眞相を窺はんと欲せば須く一本を座右に備へ給るべし

米山棟吉氏著 (肖像紀念碑コロタイプ版三葉挿入)

提督ぺるり

金參拾錢
郵稅 四錢

嘉永六年六月九日北米合衆國水師提督彼理の相州久里濱に上陸したるは即ち日本開國の嚆矢也宜なる哉昨年の七月十四日彼理上陸の一大紀念碑竣工の式を行ひて我開國の息環とすたるや著者米山氏久しく米國に在り其在米中専ら西人の眼に映じたる日本開國當時の事情を詳論し曾て之を世に問ひ内外人の好評を博したり今回更に訂正補修して江湖に問へり其材料の豊富にして而かも文章の精妙なる人をして百讀手を釋く能はざらむるものあり吾人が此書を繙き今日に在りて過去の時勢と人物とを讀むの快味を感ずると同時に米國海軍の歴史と之に伴へる彼理の一生を知得し以て其則るべきものも尠からざるを覺ゆ(東京朝日新聞評)

小松原英太郎氏序
田邊爲三郎氏序
本山彦一氏跋
井土經重氏編

兒島灣開墾史

クロス綴上製金壹圓
西洋假綴金六拾錢
郵稅 六錢

本書は藤田傳三郎氏の經營に係る岡山縣下兒島灣開墾の歴史也。筆を地理の變遷、開墾の實例、津田永忠の遺業に起し開墾出願の競争、開墾の許可、其取消の請願、行政訴訟の顛末開墾の起工、開墾地の方との和解等を叙述したるものにして十餘年間岡山縣民が極力反抗せし光景紙上に活躍し、藤田氏が精神一到の氣魄目前に飛騰するを見る。若くも世に事業を爲さんと欲する者、本書を繙かば則ち志氣を激勵し以て成業に裨補する所あらん。

芭蕉蕪村子規三家眞蹟下村爲山氏繪畫色刷十葉

春くさ
第二集

蟬しぐれ

製本頗美麗
金廿錢 稅郵不要

本書は天保以後腐敗し盡せる俳句界を一掃して新趣味の破吹に努め明治文學に俳句あるを知らしめたる子規、鳴雪氏等日本派自家の最新夏季類題俳句集也表紙及び挿繪は下村爲山氏の彩筆に成り句と相俟つて瀟洒の妙を極む青山緑り滴るが如く杜鵑聲頻りに落つるの頃這箇「蟬しぐれ」を繕いて詞人が清高の想を忍ば、一味の涼は先づ吹いて諸君が襟懷に入らむ

彫塑家山田泰雲氏作

蕪村翁塑像

高サ一尺弱
金三圓
小包(一貫匁迄)

山田泰雲氏は業を東京美術學校に受け彫塑の術に従ふこと多年頃研究修養の目的を以て俳句界の巨人與謝蕪村翁の半身塑像を造る材を月隈其他諸家の筆に取り替ね、當今の俳人諸家の意見を斟酌し苦心經營數月にして漸く成るもの弊堂請うて之を取次販賣に任ず平生蕪村翁の句風を慕へる俳人諸家は須らく一個を求め机上に安置し朝夕其高風に私淑するを怠るべからざる也

俳諧叢書第一篇 第二篇 第三篇 第十一篇 第十二篇 第十三篇

子規氏著書

俳諧叢書第一篇

俳諧大要

●既刊第四版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第二篇

俳人蕪村

●既刊第三版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第十一篇、二篇

俳句問答

●全
●既刊
二定價各册廿五錢
册郵稅各册四錢

俳諧叢書第十三篇

俳句界四年間

●既刊
定價參拾錢
郵稅四錢

俳句を學ぶもの、爲に説く事丁寧周到、子規子規の跡を叙したる者にして亦同人進歩の跡を叙したる者、即ち俳諧の大道なり。

蕪村は古今の俳傑なり。本書は著者が多年研鑽の結果を公に、蕪村をして九鼎大呂よりも重からしむ。

子規子が「日本」ホト、ギス、等に掲載したる問答体の俳諧を輯む。上巻には「俳句問答」試問及試問の答、下巻には「或問」隨問隨答を收む。

明治廿九年より三十二年に至る四年間は我新俳句進歩の歴史を劃す。之を指導し鞭撻したる著者が批評を輯めたる者にして實に此四年間の俳句史たり。附録として著者が唯雪、飄亭、岩橋桐、虛子四俳家を品騰したる四章の文字を添ふ。

古人句集

俳諧三佳書

ぼとぎす發行所編纂

●第三版

定價廿五錢
郵税四錢

ぼとぎす發行所編纂

太祇全集

●第二版

定價二十錢
郵税二錢

ぼとぎす發行所編纂

几董全集

●第二版

定價二十錢
郵税二錢

ぼとぎす發行所編纂

召波櫻良句集

●第二版

定價二十錢
郵税四錢

俳諧三佳書は同人が常に棄て難く運座の席にも郊外散策の時に懐にする三個の書「猿蓑」「續明鴉」「五重反古」を集めたり。

以て元祿、天明二盛期を代表せしむるに足る。

太祇、几董、召波、櫻良は天明の俳壇に立ちて蕪村如來を圍繞せる四菩薩なり。蕪村元帥の馬前に武者震ひして立ちほだかつたる四將軍なり。天明の俳句を研究せんとする者は、俳人蕪村、蕪村句集講義を讀め、既に俳人蕪村、蕪村句集講義に據つて蕪村如來の面目を明にす、乃ち此三書により四菩薩の句法を知らざる可けんや。

春夏秋冬

●明治新俳句の類題句集

子規選

春之部

●既刊第三版

定價廿五錢
郵税二錢

碧梧桐、虚子選

夏之部

●既刊

定價廿五錢
郵税二錢

明治新俳句の類題句集としては曩に民友社より發行したる「新俳句」の一篇あり。是れ明治二十八年頃の俳句界を代表する者にして爾來五星霜、此間幾多の變遷を経、新聞「日本」ホト、ギス等に掲載せられたる句各季幾十万の多きに上る。此間正に二三の句集無かるべからざりし其擧無うして今日に至り、新俳句第二の句集として漸く爰に「春夏秋冬」あり、之を「新俳句」の例に徴すれば宜しく幾千頁の大冊たるべきなれど、選者の精嚴なる標準は僅に各季千三百余句を選ぶ。以て如何に其句々金玉にして如何に我が明治俳句の精華たるかを知れ。春之部は子規子の選になり、夏之部以下は其病重き爲め碧梧桐、虚子の兩人代つて之を選ぶ、春之部は第三版に達し、夏之部は殘部既に多からず、若も俳句を嗜む者、明治俳句の何たるかを知らんと欲する者は一讀せざる可からず。

蕪村句集講義

春之部

第二版
定價 三十錢
郵税 四錢

夏之部

既刊
定價 卅五錢
郵税 六錢

冬之部

第二版
定價 三十錢
郵税 六錢

几董蕪村句集を讀むに當り之を前後の二編に分ち小祥大祥二忌追福の爲とするよし其跋に見ゆ。而して現存する處の蕪村句集は即ち其前編なり。鳴雪子規二先輩を始め同人等始めて此集を得てより日夕愛誦して今日に至る、其研鑽玩味の餘成る所のもの即ち此蕪村句集講義なり。明治卅一年冬より始めて卅四年秋に終る殆ど三歳の間根岸子規の虛に會して冬之部、春之部、夏之部を輪講し終り、其都度雜誌「ホト、ギス」に掲げたる者、各輯めて一卷となす。

寫生文

寒玉集

既刊
第一編
定價 卅五錢
郵税 四錢

寒玉集

既刊
第二編
定價 卅五錢
郵税 四錢

寸紅集

既刊
定價 卅五錢
郵税 四錢

新囚人

既刊
定價 卅五錢
郵税 四錢

美文を書くには寫生といふ事が尤も大切だ併し單に寫生といつただけではわかりにくい吾黨が寫生といふ斯んなものであらうと試み來つたのを輯めて「寒玉集第一編」及「第二編」を編んだのである寫生寫生若し此問題が諸君の頭に起つた場合は是非是非此書を読んで見たい。鳳に指を染めておる言文一致言文一致若し此問題が見て貰たい。「寸紅集」は燈、山、と云やうな題を出して短文を「ホト、ギス」紙上で募り子規等が之を選んだのである所謂寸鉄人を殺すと云様な面白味は此文字の處に特色があつて面白く短文章の面白味を諸君は亦文章に寸紅集の如き短文章の面白味を解せられるであらう。「新囚人」とは鼠骨が新聞社の代表人として獄に入り十五日間臭い飯を食つた間の觀察を所謂寫生的にさうして言文一致で面白く書きた者である獄中の事情は此書に由て極て明白に描かれておる社會、教育、宗教、文學の方面から此書は重きを置かれておる。



文藝社會雜誌

小天地

每月一回

十日發行

◎◎◎◎◎◎◎◎
小 雜 文 社 藝 園 報

代

價

十二册部

前前前
金金金

貳圓四拾錢
壹圓參拾錢

郵稅不
稅不

凡一切手代用は

◎小天地は小説、韻文、美文の創作評論を主とし、繪畫、音樂、演劇其他社會各方面に關する記事觀察を載する大雜誌なり
◎小天地は遊筆、浩々歌客の二家編輯に任じ、贊助寄稿者には蘇峰、逍遙、露伴、紅葉、柳浪、眉山、天外、抱月、田外、蘆花、幽芳、鏡花、風葉、不倒、南翠、春葉、春雨、秋聲、鐵幹、不孤の諸名流あり

巧なる美麗なる繪畫書二枚若くは四枚と口繪の外毎號内外文壇諸名家の肖像を精巧なるコロタイプ版として掲げ又木版を以て各種の記事を補ふ
には文壇諸大家の傑作を掲ぐる共大に新進作家を迎へ其舞臺を供するに勉むべし
には諸名家の隨筆紀行などを載せ風流雅談世の珍重する所たるに反かざるべし
には誠實穩當の見解を成りて忌憚なく時流の文學を批判す
には知名の諸家が筆を各方面に投じ周到なる觀察眼を以て珍奇なる社會知識を供す
には又時々の流行物をも精細に報道す
には一藝一能に秀づる士の實歴談及び各種有益興味のある記事とを載す
には演劇を主として各種技藝に關する秘微なる内幕と趣味ある記事とを載す
には寄稿家諸氏の筆になる小品詩歌俳句の秀什并に懸賞募集の披露を載す
には小説韻文評論と欄を分ち普ねく諸評家の言に聽き公平なる記實の筆に文界の報道をなし并に内外の著作出版業者の消息をもたらす

